

石田梅岩と「孟子の性善」

石門心学実践講座 主催者 竹花利明

はじめに

石田梅岩の「都鄙問答」には、「性善」という言葉が30回使用されており、その全てが「性理問答の段」の前半に集中している。この段は、「性善」を非とする「ある学者」に対して、梅岩が「性善」を是として反論してゆく内容となっている。

この性善とは、「孟子の性善」のことであり、この言葉も「性理問答の段」で11回使用されている。その中で重要と思われるものを、以下に示す。

- 「孟子の性善」を貴び、糟を食いとすするには非ず、我心に合うゆへなり。
- 「孟子の性善」は前にいう如く、悪に對する善に非ず。
- 「孟子の性善」は直に天地なり。
- 「孟子の性善」は生死を離れて天道なり。
- 「孟子の性善」を得れば、白昼に黑白を分くる如し。
- 「孟子の性善」との玉うは、心を尽して性を知り、性を知る時は天を知る、天を知るを学問の初じめとす。

このように都鄙問答では、徹底して「孟子の性善」の重要性を強調している。それにも関わらず、実のところ「孟子の性善とは何か」に関して、明確な説明がなされていない。

これは「孟子の性善」を誤解されかねない大きな問題である。

実際に、『石田梅岩の思想』P106において、源了圓は次のように「孟子の性善」を解説しているが、これは明らかに誤っている。この原因も「孟子の性善」の説明が成されていないためであろう。

『孟子のいう「性善」は、「天地とわれわれが完全に一体になりきった状態である。この状態はわれわれが無心になりきったときに現出する。ところでこの無心なるものは宇宙の生命そのものであって、それは静・動の運動を繰り返す。その運動を自己の生命活動において継ぐもの、これは善としかいいようがない。この善悪を超えた善は各自が対象論理の立場を離れて感得するほかはない。』

本書では、「孟子の性善」を、経書「孟子」の原文から調査し、その実体を明らかにする。さらに、孟子の性善における「性」が、「良心」であることを述べてゆく。

- ※ 梅岩の著作「都鄙問答」「齊家論」の二書を合わせて、本書では「梅岩二書」と呼ぶ。
- ※ 「梅岩二書」に示された石田梅岩の思想を、本書では「梅岩学」と呼ぶ。これは弟子たちを含めて構築された「石門心学」と区別するためである。
- ※ 「〇〇章句 第〇章」と示されたものは、経書「孟子」の一章を示す。
- ※ 「の段」と示されたものは、「都鄙問答」の一章を示す。
- ※ 孟子の言葉に関しては、現代語訳の後の()内にて、原文も示す。
- ※ 孟子の現代語訳は、「我読孟子」のHP、および、宇野精一「孟子 全訳注」を参照し、一部編集した。

孟子の性善とは何か

孟子は「性善」をどのように説明しているのか。下記にその概要を列挙する。

- ① 人は善の心「四端」を生まれながらに有している。
- ② 四端が成長すれば、「仁義礼智」となる。
- ③ 性は、「人のみ」を対象としている。
- ④ 四端と仁義礼智を「性」という。

以降、孟子の原文をもって、詳細を説明する。

四端とは何か

「四端」とは何か。それは「惻隱、羞惡、辭讓、是非」の4つの「善の心」である。

惻隱：他者に同情し、あわれみいたむ心。

羞惡：不正や悪を憎む心、恥を知る心。

辭讓：へりくだって他に譲る心

是非：正邪を判断する心。

では、なぜこの4つを「四端」というのか。

「公孫丑章句上 第6章」には、次のように書かれている。

惻隱の心は、仁の端である。羞惡の心は、義の端である。

辭讓の心は、礼の端である。是非の心は、智の端である。

(惻隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、辭讓之心、禮之端也、是非之心、智之端也)

「惻隱、羞惡、辭讓、是非」は、それぞれが「仁義礼智」の「端」になっている。ゆえに四端と言う。

「端」は、「始まり」とも、「萌芽（ほうが）」とも訳される。

萌芽とは、「芽がもえ出ること」だが、転じて、「物事のはじまり」を示す言葉である。

「孟子の性善」の特徴に、『四端が成長すれば、仁義礼智となる』と記述したが、この文がこれを証明している。

ほぼ同様の内容が、「告子章句上 第6章」にも存在する。

惻隱の心は仁であり、羞惡の心は義であり、
恭敬の心は礼であり、是非の心は智である。

(惻隱之心仁也、羞惡之心義也、恭敬之心禮也、是非之心智也)

なお、「孟子」の中で「礼」になるものとして、告子章句上では「恭敬」が使用され、公孫丑章句上では「辞讓」が使用されているが、本書においては「辞讓」を主として用いる。

人が生まれながらに四端を有する

「四端」という単語は、「公孫丑章句上 第6章」のみに現れるのだが、そこで孟子は次のように説明している。

人は生まれながらに「四端」を有している、それは人が「四肢」を有しているのと同じことだ。
「四端」があるのに、仁義礼智を行えない者は、自分を貶める者だ。

(人之有是【四端】也、猶其有四體也、有是【四端】而自謂不能者、自賊者也)

この文により、「四端は、人が生まれながらに有する」ものであることが明確にわかる。

四端については、「告子章句上 第6章」にて、次のようにも解説されている。

人は皆、惻隱の心を有している。人は皆、羞惡の心を有している。
人は皆、恭敬の心を有している。人は皆、是非の心を有している。

(惻隱之心、人皆有之、羞惡之心、人皆有之、恭敬之心、人皆有之、是非之心、人皆有之)

この文からも、四端は「人が生まれながらに有している」ものであることが理解できる。
さらに、孟子は次のような解説もしている。(公孫丑章句上 第6章)

惻隱の心がない者は、人ではない。羞惡の心がない者は、人ではない。
辭讓の心がない者は、人ではない。是非の心がない者は、人ではない。

(無惻隱之心、非人也、無羞惡之心、非人也、無辭讓之心、非人也、無是非之心、非人也)

人である限り、四端の心は必ずあるはずであり、この心がないとすれば、その者は「人ではない」とまでいう。

「公孫丑章句上 第6章」における「四端」の説明は、さらに次のように続いている。

『この【四端】を持っているのに、自分は善い行いができないと自称する人は、自分自身を傷つけているようなものなのである。そして、自分の君主が善い行いができないと言う人は、君主を傷つけているようなものなのである。』(有是【四端】而自謂不能者、自賊者也、謂其君不能者、賊其君者也)

逆も真なりとすれば、「四端を持つからこそ、善い行いができる」。

四端こそ「善」の素なのである。さらに続く。

『人は誰でもこの【四端】を持っているのだから、その心を知り、それを広げ、充満させるべきである。それは、火が初めて燃え上がり、泉が初めて湧き出すようなものである。もし、その心を十分に育て上げることができれば、天下を治めることもできるであろう。しかし、もしその心を育て上げることができなければ、両親を奉仕することすらできないであろう。』(凡有【四端】於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達、苟能充之、足以保四海、苟不充之、不足事父母。)

四端を知り、それを広げ、充満させる。それが「仁義礼智」であることは、今までの説明で十分に理解していただけるかと思う。

性善とは何か

「孟子」の原文の中で「性善」は、僅か2か所に計3つしか存在しない。その中で「性善」の説明をしているのが、先に掲げた「公孫丑章句上 第6章」なのである。

「公孫丑章句上 第6章」では、弟子の公都子が、次のように孟子に問いかける。

告子は、『性』には善も不善もないと言い・・・また別のある人は、【性善】の人があれば、性不善の人

もあると言います。・・・今、先生は【性善】を唱えています、彼らの言うことはことごとく誤りだということなのではないでしょうか？

(公都子曰、告子曰性無善不善也、或曰性可以爲善、可以爲不善、是故文・武興則民好善、幽・厲興則民好暴、或曰有【性善】、有性不善、是故以堯舜爲君而有象、以爲瞽爲父而有舜、以紂爲兄之子、且以爲君、而有微子啓・王子比干、今日【性善】、善則彼皆非與)

「性善」を問われた、孟子は「人はみな『人に忍びざるの心』がある」(人皆有不忍人之心)のだと言い、昔の聖王(先王)は、この心をもって政治を行ったと説明してゆく。

(孟子曰、人皆有不忍人之心、先王有不忍人之心、斯有不忍人之心、行不忍人之政、治天下可運之掌上)

『人に忍びざるの心』(不忍人之心)とは、「他人の不幸を見て見ぬふりができない心」である。聖王の心でもある『人に忍びざるの心』は、「善」であることは間違いがないだろう。

孟子は続けて、人に「人に忍びざるの心」が本当にあるのか、その証拠を示してゆく。

「今、幼子が井戸に落ちかけているのを見れば、誰でもはっと驚き、おそれ危ぶんで助けようとする『惻隱の心』が起こる。」(今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕【惻隱之心】)

井戸に落ちようとする幼子を助けようとする「惻隱の心」があることをもって、孟子は「忍びざるの心」の存在を証明している。

同時に、井戸に落ちようとする幼子を助けようとする「惻隱の心」は、「善そのもの」であるから、「性善」の証拠にもなりえるのである。

この「惻隱の心」が、自分自身に存在するか否か。「幼子が井戸に落ちかけている」状況を思い浮かべ、自分はその時、どのようにするかを考えてみただけでわかるだろう。

孟子の「性善」に対する解説は、さらに続く。

惻隱の心がない者は、人ではない。羞惡の心がない者は、人ではない。

辭讓の心がない者は、人ではない。是非の心がない者は、人ではない。

(無惻隱之心、非人也、無羞惡之心、非人也、無辭讓之心、非人也、無是非之心、非人也)

惻隱の心は仁であり、羞惡の心は義であり、

恭敬の心は礼であり、是非の心は智である。

(惻隱之心仁也、羞惡之心義也、恭敬之心禮也、是非之心智也)

「仁義礼智」は外からメッキされたものではなく、自分が本より所有しているものだ。
(仁義禮智、非由外鑠我也、我固有之也)

ただ人は、日頃それ（四端）に気づいていないだけなのだ。だから私は、『これらの徳は求めれば得られるが、放置しておけば失ってしまうものだ。』と言うのである。これと同じように才能があっても、それを活かさない人がいるのは、これらの徳性を追求しようとしなからである。
(弗思耳也、故曰求則得之、舍則失之、或相倍蓰而無筭者、不能盡其才者也)

これらから、「孟子の性善」とは、次のようになる。

- ① 人は善の心「四端」を生まれながらに有している。
- ② 四端が成長すれば、「仁義礼智」となる。

道は性善のみ

先に『「孟子」の原文の中で「性善」は、僅か2か所に計3つしか存在しない。』と説明した。
残りの1か所が「滕文公章句上 第1章」における、次の一文である。

孟子は【性善の道】を説き、話すたびに必ず堯と舜の名を挙げた。世子（王子）が楚から戻り、再び孟子に会った。孟子は言った。「世子よ、私の言葉を疑っているのか。【道は一つのみ】である。」

(孟子道【性善】、言必稱堯舜、世子自楚反、復見孟子、孟子曰、世子疑吾言乎、夫【道一而已】矣)

ここで孟子の言われる「道は一つのみ」の「一つ」とは、言うまでもなく「性善」のことである。

ゆえに「道は性善のみ」と置き換えてよいだろう。孟子にとって「性善」とは、「唯一の道」と言えるほど、重要な概念であることが、ここからよくわかる。

さて、「性理問答の段」において、梅岩は「孟子【道一而已】との玉ふ。」と、この箇所を引用したうえで、「汝は【一而已の一】を知らねば、道を不知。」と述べている。

ここでいう「一而已の一」もまた、「性善」であることは明白である。

性は「人のみ」を対象としている

孟子は、「告子章句上」の1章から4章に渡り、告子と「性」に関して、激しい議論を交わしている。

その中で、第2章にあるのが「人の性は善なり」（人性之善也）という言葉である。

「都鄙問答」において梅岩は、単に「性は善なり」ということもあれば、「人の性は善なり」と表現している場合があるが、いずれも、前記の原文を元としたものであろう。

孟子が「善なり」と述べているのは、「人の性のみ」でなのである。他の生物の性まで「善」であるとは言っていない。「善也」で、「孟子」全文を検索しても、ここ以外には存在しない。

また、第3章にて、告子は「生を性という」（生之謂性）と述べ、これに反論した孟子は「ならば、犬の性は牛の性と同じで、牛の性は人の性と同じだということか！」（然、然則犬之性猶牛之性、牛之性猶人之性與）と喝破している。

孟子は、「犬・牛・人の性は、それぞれ異なっている」との認識から、このように言っているのであろう。このことから、「性善」とは、あくまで「人のみ」を対象としていることが明確である。

仁義礼智を「性」という

「性」とは、通常「生まれつき」をいう。

しかしながら、孟子は「生まれつき」のすべてを「性」と言わず、仁義礼智のみを「性」と呼ぶ。

「盡心章句下 24章」には、次のように書かれている。

【口】が味に対し、【目】が色に対し、【耳】が音に対し、【鼻】がにおいに対し、【四体】が安逸に対し、いずれもその美好を欲するのは、【性】である。しかし、天命があって、だれでもそれを得られるとは決まらないから、君子は【これらを性とはいわない】のだ。

また、父子の【仁】、君臣の【義】、賓主の【礼】、賢者の【智】、聖人の天道が、常に必ず満足されるとは決まらないのは、天命である。しかし、これらの徳目は【性】なのだから、君子は（うまく行かない場合でも）運命としてあきらめずに、努力するのである

（孟子曰、口之於味也、目之於色也、耳之於聲也、鼻之於臭也、四肢之於安逸也、性也、有命焉、君子不謂性也、仁之於父子也、義之於君臣也、禮之於賓主也、知之於賢者也、聖人之於天道也、命也、有性焉、君子不謂命也。）

口、目、耳、鼻、四体などの「身体の欲求」を性であると認めながら、「性とは言わない」と述べる。

そのうえで、「仁義礼智や天道を性という」と述べている。

孟子は、「性」を次のように2つに分けて考えているのだろう。

- ① 仁義礼智の性
- ② 仁義礼智以外の性

孟子自身も含めた「君子」は、「仁義礼智の性」のみを「性」と呼ぶ。
ゆえに、「孟子の性善における性」とは、「仁義礼智の性」なのである。

ちなみに、「仁義礼智以外の性」には、どのようなものがあるのか。ここで考察しておきたい。
なお、「性」とは、「生まれつき」のことであるが、より明確にするため「先天性」に置き換える。

まず、先天性は「人間以外の生物」にも存在する。

ウイルス以外の全生物は、遺伝子によりその身体的特徴が決まっているが、これも「先天性」である。
しかし、孟子の性善は「人のみが対象」であるゆえに、これは「仁義礼智以外の性」となる。

人にも、男女の別や肌の色などの「身体的な先天性」があるが、これも仁義礼智ではない。
ゆえに「仁義礼智以外の性」である。

身体以外の「精神・心」の先天性であっても、本能、感情、欲望などは「仁義礼智以外の性」である。
これらは、「悪の原因」ともなるのだが、その詳細は後述する。

都鄙問答における「仁義礼智の性」

「孟子の性善における性」とは、「仁義礼智の性」なのであるが、この言葉自体が、都鄙問答に書かれている。この詳細は後述するため、ここでは紹介に留める。

- ① 今日 人に生れたる者には五常五倫の教えあり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行い【仁義礼智の性】を全うし 天命に至らしむる教えなり。
- ② 人と生るれば、【仁義礼智の性】は、古今相い続いて不変。是天地に有りては元亨利貞と云う。

この中で、①は「浄土宗之僧 念仏を勧るの段」、②は「或人天地開闢の説を譏るの段」にある。

良心とは何か

「仁義礼智の性」を現代人が理解するのは難しい。

そもそも「性」という言葉自体が、梅岩の江戸時代においても理解しがたいものであった。ゆえに、梅岩の弟子であり、後に石門心学を広めた手島堵庵は、これを「本心」と言い換えた。

しかし、現代人に「本心」と言えば、これまた理解しがたく、誤解されるであろう。本心は「本当の心」と解されるが、自分自身の「本当の心」は何であるのかでさえ、明確ではない。

結論を言えば「仁義礼智の性」は、「良心」と言い換えるべきである。現代人においても、良心が自らの心に存在していることを明確に理解できるからでもある。

本章では、「良心」を明らかにしてゆく。

良心の語源

「良心」は、孟子の「告子章句上 第8章」にある、以下の文が「語源」となっている。

（人が山を伐採し、その結果ハゲ山になったとしても）それが山の【性】であるはずがない。人に存する性も同様で、そこに【仁義の心】がないわけがない。ただ人がその【良心】を放ち失うのは、やはり、斧で牛山の木を伐ってしまうようなものである。

（此豈山之【性】也哉、雖存乎人者、豈無【仁義之心】哉、其、所以放其【良心】者、亦猶斧斤之於木也）

これにより、「仁義の心」を「良心」と呼んでいるのが明白である。ならば、仁義の心を「仁義の良心」と言い換えても、問題はないだろう。また、仁義は「仁義礼智」を代表しているので、「仁義礼智の良心」と言ってもよいだろう。

放心とは何か

孟子は、「凡人の日常における、良心の状態」として、「放心」という言葉を用いている。この「放心」は、「良心」を理解するための重要なキーワードであるため、解説する。

前述した「告子章句上 第8章」では、次のように表現されていた。

ただ人がその【良心】を放ち失うのは、やはり、斧で牛山の木を伐ってしまうようなものである。
(所以放其【良心】者、亦猶斧斤之於木也)

ここで「良心」は、「放ち失う」ものであることを暗に示している。

この「放心」という単語は、「告子章句上 第11章」で、一度のみ使用されている。

「【仁は人の心である。義は人の道である。】その道を捨てて指針もなく、【その心が放れても】求めることを知らないとは、哀しいものだ。人は鶏や犬が放れたら捜し求めるのに、心が放れても探し求めることを知らない。学問の道とは他ならず、その【放心】を求めるのみ。」

(孟子曰、【仁人心也、義人路也】、舎其路而弗由、放其心而不知求、哀哉、人有鶏犬放、則知求之、有放心而不知求、學問之道無他、求其【放心】而已矣。)

「その心が放れても」の心とは、「仁の心、義の道」であることは明白である。
これを「仁義の心」と言い替えても問題はないだろう。

前節で説明した通り、孟子は『仁義の心を、「良心」と呼んでいる』のである。
ゆえに、ここでいう「放心」とは、「放れてしまった良心」または「見失った良心」であると言える。

「学問の道とは他ならず、その『放心』を求めるのみ。」は、
「学問の道とは他ならず、その『見失った良心』を求めるのみ。」である。

都鄙問答における良心

梅岩は「都鄙問答」において、6回「良心」を使用している。齊家論では使用されていない。
これらを順番通りに並べて提示する。

- ① 人倫の大原は天に出て、【仁義礼智の良心】よりなす。
- ② 【仁義礼智の良心】は、其の五倫を行なわする心なり。
- ③ 平旦清明の気より、【仁義礼智の良心】を生ずることを不知。
- ④ 【性善】を会得すれば、気も亦清明にして、【仁義の良心】を発す。
- ⑤ 常に【仁義の良心】起らば、人事は此に越ゆることあらんや。
- ⑥ 其羞惡の心を推して知らば、【仁義の良心】に至るべし。

このように「良心」を使用する場合、必ず「仁義礼智の良心」か、「仁義の良心」としている。
梅岩は「性善」の重要な要素である「仁義礼智」につなげて「良心」を使用しているのである。

また、「良心とは何か」で説明した通り、「良心」とは「仁義の心」である。ゆえに、「仁義の良心、仁義礼智の良心と言い換えてもよい」と述べたが、この言葉をそのまま梅岩は使用している。

さて、列挙した中では、①のみ「都鄙問答の段」に存在し、それ以外の全てが「性理問答の段」に存在する。これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

① 人倫の大原は天に出て、【仁義礼智の良心】よりなす。

『人倫の大原は天に出て、【仁義礼智の良心】よりなす。孟子又曰、学問之道無他、求其放心而已。』

「人倫」とは、「五倫による円滑な人間関係、人の道」。

「良心」は、天に通じて、天から湧き出るものであり、それは人倫の大本にもなっている。

最後の「学問之道無他、求其放心而已」（学問の道とは他ならず、その『放心』を求めるのみ）は、前述した通り、「学問の道とは他ならず、その『見失った【良心】』を求めるのみ」という意味である。

② 【仁義礼智の良心】は、其の五倫を行なわする心なり。

『汝は一而已の一を知らねば、道を不知・・・人の大倫は用なり。体立ちて用行なわる。其の用は君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の交わりなり。【仁義礼智の良心】は、其の五倫を行なわする心なり。汝は此の心の一なることを不知。』

ほぼ、①に近い内容であるが、人倫が「君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の交わり」「五倫」であることを明白に述べたうえで、良心が「其の五倫を行なわする心」とであると解説している。

なお、最初の「一而已の一」も、最後の「此の心の一」も同じもので、「道は性善のみ」の章で説明した通り、いずれの「一」も「性善」である。

③ 平旦清明の気より、【仁義礼智の良心】を生ずることを不知。

「平旦の気」（平旦之氣）は、「良心」を説明した「告子章句上 第8章」に一度だけ使用されており、同じ章にて「清明の気」は、「夜気」（夜の大气。人の気を回復するもの）と表現されている。

この文の中で、孟子は「良心は養われれば成長するが、養うことがなければ、萎み、消えてしまう」と主張している。長くなるが、如何に引用する。

（人が山を伐採し、その結果ハゲ山になったとしても）それが山の【性】であるはずがない。人に存

する性も同様で、そこに【仁義の心】がないわけがない。ただ人がその【良心】を放ち失うのは、やはり、斧で牛山の木を伐ってしまうようなものである。

(此豈山之【性】也哉、雖存乎人者、豈無【仁義之心】哉、其、所以放其【良心】者、亦猶斧斤之於木也)

毎日毎日、木を切るように、良心を切ったら、りっぱな良心があると言えるだろうか。人にも昼夜生長する【平坦の気】があるのだが、善を好み悪を憎む心が、ほんとうの人間らしさに近づくことがきわめて少ないのは、人が昼間に行うことが、やはりこの気を拘束し消亡させるからである。

(旦旦而伐之、可以焉美乎、其日夜之所息、【平坦之氣】、其好惡與人相近也者幾希、則其旦晝之所焉、有枯亡之矣)

拘束をくり返していれば、夜気(夜だけの生長による清明の気)は存することができなくなる。夜気が存することができなくなるとは、禽獣とあまり違わない。

(枯之反覆、則其【夜氣】不足以存、【夜氣】不足以存、則其違禽獸不遠矣)

この禽獣同様になった人のありさまをみて、その人はもともと仁義を行う能力がないのだと考えるのは誤りで、こんなのはどうして人間の本性の実情であろうか。

(人見其禽獸也、而以爲未嘗有才焉者、是豈人之情也哉)

ゆえに、養育さえしてやれば、何物でも生長せぬことはなく、養いを失っては、何物も消亡せぬことはないのである。

(故苟得其養、無物不長、苟失其養、無物不消)

孔子も『取り守れば存するが、放置すればなくなる。出入りには決まったときがなく、その居場所もわからない。ということばがあるが、まさに人の良心をいったものであろうか』と言われたのは、まことにそのとおりである。

(孔子曰操則存、舍則亡、出入無時、莫知其郷、惟心之謂與。)

- ④ 【性善】を会得すれば、気も亦清明にして、【仁義の良心】を発す。
- ⑤ 常に【仁義の良心】起らば、人事は此に越ゆることあらんや。

この2つは、「性善を会得すれば、気も亦清明にして、【仁義の良心】を発す。常に【仁義の良心】起

らば、人事は此に越ゆることあらんや。」とつながっている。

「孟子の性善」を会得すれば、「仁義の良心を発する」ことができる。そうなれば「人間関係においてこれ以上素晴らしい状態はない」と。(人事は此に越ゆることあらんや)。

⑥ 其羞惡の心を推して知らば、【仁義の良心】に至るべし。

「子曰 無惻隱之心非人也 無羞惡之心非人也と。汝最前より心を不得を苦しんで赤面し、不善を恥るは即ち羞惡の心なり。其羞惡の心を推して知らば、【仁義の良心】に至るべし。」

「無惻隱之心非人也 無羞惡之心非人也」は、「四端とは何か」でも説明した「公孫丑章句上 第6章」の一部で、現代語訳は「惻隱の心がない者は、人ではない。羞惡の心がない者は、人ではない。」となる。

「不善を恥じる羞惡の心からも、仁義の良心に至ることができる」と梅岩は述べている。

都鄙問答における放心

「都鄙問答」において、4回「放心」を使用しているが、うち1回は学者の問いなので省く。

- ① 孟子又曰、学問之道無他、【求其放心】而已。
- ② 【其放心を求る】と説くも、聖人の心は無心なりと説くも 二つには非ず、一致なり。
- ③ 天地の心に還える所にていう時は、【放心を求むる】と説き、又求めうれば天地の心となる。

この中で、①は「都鄙問答の段」、②③は「性理問答の段」に在する。

これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

① 孟子又曰、学問之道無他、【求其放心】而已。

現代語訳は「孟子の学問の道とは他ならず、その『放心』を求めるのみ」であり、「学問の道とは他ならず、その見失った【良心】を求めるのみ」という意味である。

- ② 【其放心を求る】と説くも、聖人の心は無心なりと説くも 二つには非ず、一致なり。
- ③ 天地の心に還える所にていう時は、【放心を求むる】と説き、又求めうれば天地の心となる。

この2つは、「性理問答の段」の最後において、この段の結論として、以下、述べられている。

『【其放心を求る】と説くも、【聖人の心は無心】なりと説くも 二つには非ず、一致なり。天地は物を生ずるを以て心とす。其の生ずる所の物、各天地物を生ずる心を得て心となす。然れども人欲に掩われて此の心を失す。故に心を尽くして、天地の心に還える所にていう時は、【放心を求むる】と説き、又求めうれば天地の心となる。天地の心になる所にて説くときは【無心】と云う。天地は無心なれども四季行れて万物生る。聖人も天地の心を得て、【私心なく無心の如く】なれども、【仁義礼智】行なわる。』

生物ではない天地は「無心」であり、「聖人も天地の心を得て」いる。これらから、「聖人の心は無心なり」とも言えるが、その実は「私心なく無心の如く」である。

ゆえに、真の意味での「無心」ではなく、良心の作用としての「仁義礼智」は行われる。

「良心」や「仁義礼智」という性善なくして、聖人になどなりえない。良心に従い、「仁義礼智」を完成させた実体こそが、聖人なのである。

また梅岩は、「放心を求むる」ことができれば、「天地の心となる」とも主張している。

「放心を求むる」とは、「見失った良心を求むる」である。
ゆえに、「良心を得ることができれば、天地の心となる」とも言える。

齊家論における放心

「齊家論」において、5回「放心」を使用している。

- ① 不仁となるものを【放心】と言う
- ② 先ず【放心】の一二を挙げて言わば、名聞と利欲と色欲なり
- ③ そのほか万事不義無道を為し、心を煩わすは皆、【放心】を以てなり。
- ④ 聖賢これを歎き給い「学問の道他なし、その【放心】を求むるのみ」と孟子も既に説きたまえり。
- ⑤ 然れども、執行の功により、【放心】を求め得ることあり。求むる時は、心の一致なることを知る。

この5つは、ほぼ同じ場所に存在する。

前半の3つで「放心」は、「不仁」であり、「過剰な欲望」であり、「不義無道」とであると解説している。

前半の解釈のまま、後半の「放心」を「不仁」と置き換えれば、下記の通りになる。

- ④ 聖賢これを歎き給い「学問の道他なし、その【不仁】を求むるのみ」と孟子も既に説きたまえり。
- ⑤ 然れども、執行の功により、【不仁】を求め得ることあり。求むる時は、心の一致なることを知る。

これはまったく理解不能となる。極悪人でない限り、「不仁を求むる」ことなどありえない。

前半3つの「放心」は悪であり、後半2つの「放心」では善を求めている。すなわち、同じ単語でも「意味がまったく逆になる」。ゆえに「放心」とは何かをしっかりと理解しなければ、読み取れない。

単に「放心」と言った場合は、良心に反している状態であり、「悪」である。
良心に反しているから、「不仁」であり、「過剰な欲望」であり、「不義無道」となる。

しかし、「放心を求むる」と言った場合は、「見失った良心を求むる」ことであるため、求め得れば「良心に従う」状態となり、「善」となる。

良心は「善」であり、放心は「悪」であるが、「放心を求める」は、「善を求めること」になる。

最後に、「放心」の入った文を、前後を追加して以下に掲げる。

『不学者は見聞く所の欲にひかれ、固有せし仁心を見失ひ、これを求むることを知らず。知らざればことごとく不仁となる。不仁となるものを【放心】と言う。』

もっとも色心は愛より来ると言えども、過ぐれば忽ち不仁となる。先ず【放心】の一二を挙げて言わば、名聞と利欲と色欲なり・・・

そのほか万事不義無道を為し、心を煩わすは皆、【放心】を以てなり。此の味わいを知らず、仁に心を尽くさざるは哀しきことかな。

聖賢これを歎き給ひ「学問の道他なし、その【放心】を求むるのみ」と孟子も既に説きたまへり。予教ゆる所もこれにより。孟子開き示す所、至って重きことなれば、容易ことにあらず。然れども、執行の功により、【放心】を求め得ることあり。求むる時は、心の一致なることを知る。』

梅岩学における悪とは何か

「孟子の性善」と「良心」に続き、梅岩学における「悪とは何か」「善とは何か」に関しても追求する。

善と悪

善とは何か、悪とは何か。

「孟子の性善」から鑑みれば、次の通りであろう。

善：良心に従うこと。(性に率(したが)うこと、天命に率うこと)

悪：良心に反すること。(性に反すること、天命に反すること)

「性善」であったとしても、人は「悪」を成す。

万民に全て「良心」が存在していても、この良心に反することも人にはできる。

「良心に反する」という点で、「四端の逆」を考えてみる。

惻隠：他者に同情し、あわれみいたむ心 → 他者を傷つけ、他者から奪う。

羞悪：不正や悪を憎む心、恥を知る心 → 不正を悪いと思わず、恥を知らずな行為を平気で行う。

辞讓：へりくだって他に譲る心 → 傲慢不遜で、自分勝手に振舞う。

是非：是非善悪を判断する心 → 是非や善悪を判断することができない。

惻隠は、四端を代表する。ゆえに

「他者を傷つけ、他者から奪う」ことこそ、「悪」の代表であり、

「他者に同情し、憐み、助ける」ことこそ、「善」の代表である。

「人間関係」において善を成すのか、悪を成すのか。

これが最も重要であるゆえに、孔子も孟子も梅岩も「人倫」を重視したのであろう。

「悪とは何か」をさらに明確化することで、「善とは何か」も明確に見えてくるであろう。

ゆえに、先に「悪とは何か」を論証する。

悪を成す理由

次にどのような理由で、人は悪を成すのだろうか。それは次のようなものであろう。

- ① 自らの欲望を優先し、自分の意思で悪を成す。
- ② 自らの感情に左右され、かっとなって思わず悪を成す。
- ③ 道徳を知らず、悪が分からずに悪を成す。

これらを絡め、以降で梅岩二書における「悪」および「悪の原因」を追究してみたい。

過剰な欲望

前章にて、『単に「放心」と言った場合は、良心に反している状態であり、「悪」である。』と述べ、下記の文を事例の1つとして掲げた。

「もっとも色心は愛より来ると言えども、過ぐれば忽ち不仁となる。先ず【放心】の一二を挙げて言わば、名聞と利欲と色欲なり」

「色心は愛より来る」ものであるのに、これが過剰になれば「不仁」となる。その代表例として梅岩は、「名聞と利欲と色欲」を掲げている。

「名聞と利欲と色欲」も、それが「適切であれば善」であるが、「過剰であれば悪」となる。「適切か、過剰か」「善か、悪か」を判断するのは、各々の「良心」に他ならない。

これを「名聞と利欲と色欲」について説明した、梅岩の言葉で検証する。

衆人はたとへ少々の善事を為せども、己を他より誉められたく思う心よりする善事なれば、実の善事にあらず。そのほか身上のこと、氏系図のこと、或いは芸能、智恵に至るまで、己相応より宜しく思われたき心あるは皆、【名聞】なり。

名聞とは、「過剰な名誉欲」のことである。褒められるための善は「偽善」であって、本当の善ではない。「己相応よりよろしく」思われたい欲望、「己を大きく見せたい」欲望は、「名聞」と言えるだろう。

名誉欲も「分相応」であるならば悪とはいえない。しかし、それが「過剰であれば悪」になる。

又利欲というは、道なくして金銀財宝を増やすことを好むより、心が闇くなりて、金銀あるが上にも溜めたく思い、種々の謀を為し、世の苦しみをかえり見ず、剰え親子・兄弟・親類まで不和になり、互いに恨みを含むに至る。

利欲とは、「過剰な金銭欲」のことである。強奪・泥棒・詐欺のような犯罪から、商取引上の嘘・ごまかしなど、道に合致しない方法で金銭を得ようとするのが「利欲」である。まさに「他者を傷つけ、他者から奪う」であろう。

また、守銭奴となり、人間関係を壊してまで「金銭」を優先することも「利欲」である。相続問題における兄弟間の争いなども、この一時例であろう。

得る方法が正しく、「節度ある」金銭欲なら悪とはいえない。しかし、それが「過剰であれば悪」になる。

色欲と言うは、若き時は前後の弁えもなく、品形にのみ愛で、此所かと思えば彼処にわたり、流れの女にさえ心を見透かされるれど、それも知らず、親の許さぬ金銀を遣う。又老いたる人も夫婦諸共、道に入るべ

き時、腰元や下女に手を掛け、又は若き女を抱え寵愛し、親しむべき女房には疎くなり、頭には白髪を頂くことを知らず。栄耀栄花の驕りの為に、心を悩ますこと甚だし。

色欲とは「性欲」のことである。夫婦が性欲を満たすことは、私欲・欲心ではない。夫婦愛和するために必要であり、子孫繁栄のために必要な「善」である。

問題は、現代において「不倫」と言われる男女の交わりであろう。それは、配偶者やパートナーを裏切り、傷つける行為であるため「悪」である。また、独身であったとしても、あちらこちらで不埒に性欲を満たすとすれば、これもまた「悪」と言えるだろう。当然、相手の合意のないまま性行為を行う強姦などの犯罪は「悪」である。

人欲とは何か

「精選版 日本国語大辞典」によれば、「人の欲心。人間の欲望。」と解説されている。

「天理人欲」という四字熟語もあるが、「デジタル大辞泉」によれば、その意味は、次のとおりである。

『中国哲学で、倫理思想を表す概念の一。天理は自然のままの本性、人欲は外部の刺激によって起こる欲求。宋学では、人欲よりも天理に従うことを強調した。』

「礼記」「楽記」には、『人、物に化する者は、天理を滅して、人欲を窮むる者なり。』と書かれている。

「人、物に化する者」は、「物に心を奪われ、まるでその物と一体化してしまうような状態の人」。

「人欲を窮むる者」とは、「自分の欲望を際限なく追求し、それに振り回されてしまうこと。」

「礼記」では、「人欲とは、天理に反し破壊するもの」と考えられていたのであろう。

この「人欲」は、都鄙問答に4回、書かれている。(齐家論にはない)

- ① 旧染の【人欲】出て行い難し。行なわざれば心を欺むき、道心と人心と戦うゆへに中を苦しむ。
- ② 【人欲】のままにして無道を行い、五倫五常の道に背むき、出家は五戒を破り、仏の道に背むくべし。
- ③ 天地物を生ずる心を得て心となす。然れども【人欲】に掩（おお）われて此の心を失す。
- ④ 宮寺の奉加と云うとも毛筋ほども、【人欲】勝手あらば此不義の類なり。

この中で、①は「都鄙問答の段」、②③が「性理問答の段」、④は「或人主人行状の是非を問うの段」に存在する。

これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 旧染の【人欲】出て行い難し。行なわざれば心を欺むき、道心と人心と戦うゆへに中を苦しむ。

「其人最初に思うようは、今まで遊興を好む心も、利欲に耽る心も、柔弱も忽に止み、心清浄にして、楽しむべしと思ひし所に、忠孝と家業を情に入れ、身を敬まざれば、安楽になられず。」がこの文の前にある。

ゆえにここでいう「旧染」とは、「遊興を好み、利欲に耽る柔弱な心」のことであり、梅岩はこれを「人欲」と述べている。

後半では「道心と人心が戦う」と書かれているが、道心は「善なる良心」であり、人心とは「悪なる人欲」であろう。善と悪は戦うゆえに心が苦しむのである。

- ② 【人欲】のままにして無道を行い、五倫五常の道に背むき、出家は五戒を破り、仏の道に背むくべし。

梅岩は、「五倫五常の道を以て、我より以下の人に、教えんことを志す」と、自らの志を述べている。

五常とは、「仁義礼智信」であり、これらが元になって「五倫」という人倫を形成する。ゆえに「人倫の大原は天に出て、仁義礼智の良心よりなす。」と述べているのである。

その「五倫五常の道に背むき、無道を行う」ものこそ、「人欲」なのである。なお、「人欲のまま」は、「本能の赴くまま」や「欲望のまま」に極めて近い表現である。

- ③ 天地物を生ずる心を得て心となす。然れども【人欲】に掩（おお）われて此の心を失す。

「孟子の性善は直に天地なり」と言われているように、「天地物を生ずる心を得て」の心とは、「良心（性）」なのである。

すなわち、「人欲に覆われれば、良心を失す」であり、「良心を失す」（放心）の原因は「人欲に覆われる」と理解できる。

- ④ 宮寺の奉加と云うとも毛筋ほども、【人欲】勝手あらば此不義の類なり。

現代語訳『奉加（ほうが）とは、神仏への寄進・寄付のこと。寄付をする場合も、自分勝手な人欲を基にするならば、それは「不義」に違いがない。』

ここでの「人欲」とは、「これで自分が死後良いものに生まれ変わることができる」と自己中心

的な願いをすることである。

欲心とは何か

「精選版 日本国語大辞典」によれば、「ほしがる心。欲ふかくむさぼる心。欲念。」と解説されている。これは「単なる欲望」というレベルでなく、「強欲な心」であり、仏教でいうところの「貪欲」であろう。ゆえに、本節においてはあえて「強欲心」と表現する。

「過剰な欲望」の節にて、次のように書いた。

「名聞と利欲と色欲」も、それが「適切であれば善」であるが、「過剰であれば悪」となる。「適切か、過剰か」「善か、悪か」を判断するのは、各々の「良心」に他ならない。

このような意味において、「欲心」とは、「過剰な欲」であり、それゆえに「悪」であると言える。

「欲心」は、都鄙問答に14回、齐家論に3回、書かれている。

この中で、重要と思われるもののみ、以下に掲げる。

- ① 汝は少々の金銀にて父母の命にさからい、己が【欲心】を以て、親の心を傷む。
- ② 今君に仕る者も【欲心】を離れ、古人を見て法を取るべし。
- ③ (商売の結果、財宝が)富山の如くに至るとも、【欲心】とは言うべからず。
- ④ 商人の道を知れば、【欲心】を離れ仁心を以て勉め、道に合うて栄ゆるを学問の徳とす。
- ⑤ 売買の利ばかりを【欲心】にて道なしと云い、商人を悪んで断絶せんとす。
- ⑥ 汝が親方の【欲心】を離れて、金銀を出し人を救わるゝは、聖人の御志に能く合えり。
- ⑦ 露塵も諂い曲がる【欲心】なく 離れ切ったる警めは 大丈夫とも云いつべし。
- ⑧ 然るに【欲心】に覆われ、此の正直を行わずして、浅ましき交わりになり行くは悲しきことなり。

この中で、①は「孝の道を問の段」、②は「武士の道を問の段」、③は「商人の道を問の段」、④⑤は「或学者 商人の学問を譏るの段」、⑦は「或人主人行状の是非を問の段」、⑦⑧は「齐家論」である。

以下、それぞれの段における「欲心」の回数を示す。

「孝の道を問の段」、1回。

「武士の道を問の段」、1回。

「商人の道を問の段」、2回。

「或学者 商人の学問を譏るの段」、9回。

「或人主人行状の是非を問の段」、1回

これを見てもわかるように、圧倒的に「或学者 商人の学問を譏るの段」が多い。
これは、梅岩が「商人の利益が欲心か、否か」に対して、徹底的して議論しているからである。

さて、掲げた「欲心」のこれら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 汝は少々の金銀にて父母の命にさからい、己が【欲心】を以て、親の心を傷む。

「孝の道を問の段」

兄弟を憐み、金を貸そうとする両親に対し、反対する「ある人」。彼が大切にしているのは、親でなく、金銭であることを見抜いて、梅岩がたしなめた言葉である。

金銭に対する「強欲心」は、親に対する「不孝」となり、人間関係を壊す元になる「悪」である。

- ② 今君に仕る者も【欲心】を離れ、古人を見て法を取るべし。

「武士の道を問の段」。

梅岩は「毫釐ほども禄を望むに心あらば、君を害す本となるべし。古より【不忠をなす者は、禄を貪る】、心よりなす所なり。」という。禄とは「給料」のことであり、金銭の事である。だからこそ、梅岩は、「武士として君主に仕えるならば、強欲心を離れろ」というのである。

金銭に対する「強欲心」は、君主に不忠となる「悪」である。

- ③ (商売の結果、財宝が) 富山の如くに至るとも、【欲心】とは言うべからず。

「商人の道を問うの段」

正しい商売を行い、利益を得て、その財宝が「富山の如く」になったとしても、それは「強欲心」とは言わないのである。

- ④ 商人の道を知れば、【欲心】を離れ仁心を以て勉め、道に合うて栄ゆるを学問の徳とす。

「或学者 商人の学問を譏るの段」

「商人に学問など必要がない」という学者に対して、梅岩は「商人の学問、商人の道」の必要性を説いて行く。商売とは、「強欲心」で行うべきものではなく、仁心、すなわち「良心」をもって行うべきものである。

- ⑤ 売買の利ばかりを【欲心】にて道なしと云い、商人を悪んで断絶せんとす。

「或学者 商人の学問を譏るの段」では9回に渡り、「欲心」が説かれている。
これらもまとめて以下に説明する。

(俸禄を) 受くる道にて受くるを【欲心】とはいわず。

梅岩は、「君主に仕える者(武士)が、俸禄を受けること」の是非を問う。これに学者が答えた言葉である。金銭を受けても、それが道に適う正当なものであるならば、「強欲心」ではないのである。

商人の買利も天下御免の禄なり。夫を汝独り 売買の利ばかりを【欲心】にて道なしと云い、商人を悪んで断絶せんとす。何を以て商人計りを賤め嫌うことぞや。汝今にても売買の利は渡さずと云うて、利を引て渡さば、天下の法破りとなるべし。

学者に「武士の俸禄は、強欲心でない」と言わせたいので、「商人の買利も天下御免の禄」であり、これもまた「強欲心ではない」と述べ、さらに「売買の利を引て渡さば、天下の法破りとなる」とも述べるのである。

日本唐土にても売買に利を得ることは定りなり。定りの利を得て職分を勉れば自から天下の用をなす。商人の利を受けずしては家業勉らず。吾禄は売買の利なるゆえに買人あれば受るなり。呼ぶに従って往くは、役目に応じて往くが如し、【欲心】にあらず。

日本のみならず、孔子の生まれた中国においても、売買で利益を取るの、定められたルールであると梅岩は説く。そのルールに則り、商売に勤めることで「天下の用をなす」。もしも、利益を受けなければ、商人は商売を続けることができないため、「天下の用」をなせなくなるがゆえに、利益を受けるのは、「強欲心」ではないと説明してゆく。

士の道も君より禄を受けずしては勉らず。君より禄を受くるを【欲心】と云うて、道にあらずと云わば、孔子孟子を始として、天下に道を知る人あるべからず。然るを士農工にはづれて、商人の禄を受くるを【欲心】と云い、道を知るに及ばざる者と云うは如何なることぞや。我教ゆる所は商人に 商人の道あることを 教ゆるなり。全く士農工のことを教ゆるにあらず。

商人は「利益」を禄として受け取る。それこそが「商人の道」なのである。

然れども【欲心】勝て、百目の所が離れ難きゆへに、不義の金を設け、可愛子孫の絶へ亡ることを知らざるは哀しきことにあらずや。

仕入先に対しては「品が悪い」と買い叩きながら、顧客には「品が良いものだ」と言って売る。これを梅岩は「二重の利」という。また、倒産者から礼金を受け取って、債権者に代金をあきらめさせることを「倒者の礼銀」と呼ぶ。

二重の利も、倒者の礼銀も、「不義の利益」である。他にも、嘘をついて品物を売ったり、必要なアフターフォローをしないなど、いわゆる商道徳に反し、仕入先や顧客を騙し、迷惑を掛ける行為の全てが、「不義の利益」であり、「強欲心」と言えよう。

- ⑥ 汝が親方の【欲心】を離れて、金銀を出し人を救わるゝは、聖人の御志に能く合えり。

「或人主人行状の是非を問うの段」

自らのために金銭を使わず、他人を助けるために金銭を使う「ある人の主人」を、梅岩は「聖人の志に合う」と、大いに褒めたたえる。

本章の最初に、『「他者に同情し、憐み、助ける」ことこそ、「善」の代表である』と書いた。まさに、これが「惻隱の心」から発する「仁」の行為そのものなのである。

- ⑦ 露塵も諂い曲がる【欲心】なく 離れ切ったる警めは 大丈夫とも云いつべし。

「齊家論」

伊勢神宮に参った時、ある豪商の手代が、自らの主人の母と妻を「後室奥方兩人」と呼ぶ。

これに対して、大夫（神職下位の者）は、「町家の姑や嫁を、後室の奥というのは、（伊勢神宮の）皇大神宮の神に対して、大いなる非礼だ。神は非礼を受けられない」と喝破する。

さらに続けて、「全てすべて貴きは貴く賤しきは賤しく、町家ならば町家相応の名を呼ぶべきだ。相応の名を呼ぶことこそ、「正直なる故、皇大神宮も受けさせ玉うなり」と竹割るように言う。

その後続く言葉が次である。

其の手代忽ちに善に化せられ、愚は変じて智にかえり、奢りは変じて儉となる。有り難き御師の徳ならずや。身は正直の神明に捧げ、旦那には心を尽くす所より、露塵も諂い曲がる【欲心】なく 離れ切ったる警めは 大丈夫とも云いつべし。

大夫（神職下位の者）の言葉は、「身は正直の神明に捧げ、旦那（豪商の主人）には心を尽くす所より」発せられた戒めである。その言葉には微塵も「欲心」がない。たとえ、自らが責任を負う結果になっても「正直」を貫いているのである。なお、最後の「大丈夫」とは、「立派な男子。丈夫をほめていう語」である。

- ⑧ 然るに【欲心】に覆われ、此の正直を行わずして、浅ましき交わりになり行くは悲しきことなり。

「齐家論」

以下の言葉に続く文である。

『政治を行う武士は、農工商の「頭」(かしら)なのだから、清潔にして正直であるべきだ。もし、私欲があるなら、そのところは暗闇になる。また、農工商においても、家の主は「頭」である。もし、私欲があるなら、家内が暗闇になる。全てのものの「頭」となるものは、慎むべきである。』

それなのに、「強欲心」に覆われ、この「正直」を行わずに、浅ましき交わりなどすべきではないと。

私欲とは何か

「精選版 日本国語大辞典」によれば、「自分の利益だけをはかろうとするいやしい欲望。また、それによっておこる妄念。」と解説されている。

「私欲」は、都鄙問答に1回、齐家論に6回、書かれている。
この中で、重要と思われるもののみ、以下に掲げる。

- ① 我より不仁の【私欲】を以て、かくなし行い、天命と片づけては置きがたかるべし。
- ② 人は一個の小天地なり。小天地ゆえ、本【私欲】なきものなり。
- ③ 【私欲】ほど世に害を為すものはあらじ。
- ④ 【私欲】を持って邪知者を頼み相談せば、何程の借金有るとも

この中で、①のみが「医の志を問うの段」であり、②以降は全て「齐家論」である。
これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 我より不仁の【私欲】を以て、かくなし行い、天命と片づけては置きがたかるべし。

「医の志を問うの段」で、「ある人」に、医師としての道を問われた梅岩は、次のように答える。

『もしも、渡世(暮らして行くための職業)のためならば、医者はずべきでない。もしも、渡世のためなら、薬代を払えない人のところへは行きたくなくなるだろう。「そのうち見に行く」と言って延期し、その結果、病人が死ぬとしたら、「天命だ」と言ったところで、医者としての正しい心になってみれば、自分の不仁な【私欲】であることを理解し哀しく思い、天命と片付けられなくなる。』

この現代語訳の最後の部分が、ここに掲げたものである。

- ② 人は一個の小天地なり。小天地ゆえ、本【私欲】なきものなり。
- ③ 【私欲】ほど世に害を為すものはあらじ。

「齊家論」において、特に重要な部分に、5つの「私欲」が列挙されている。
長くなるが、原文を提示しつつ、その内容の1つ1つを説明してゆく。

天より生民を降すなれば、万民はことごとく 天の子なり。故に 人は一個の小天地なり。小天地ゆえ、
本【私欲】なきものなり。

「万民の全ては、天の子」との認識が梅岩にある。
それゆえに、「人は一個の小天地」であり、本来は「私欲」なきものと語る。
すなわち、「人は善なる存在であり、本来の姿は悪なきもの」とであると、梅岩は考えている。

この故に 我が物は我が物、人の物は人の物、貸したる物は受け取り、借りたる物は返し、毛筋ほども私なく、ありべかりにするは正直なる所なり。この正直行わるれば、世間一同に和合し、四海の中 皆 兄弟の如し。我願う所は、人々ここに至らしめん為なり。

「我が物は我が物、人の物は人の物、貸したる物は受け取り、借りたる物は返し」は、人間関係における「所有権」の問題である。小さなことであっても、自他の区別をきちんとつける。これが「正直」の第一歩であり、この「正直」を重ねることで、「世界の和合」にもつながる。それが梅岩の願いである。

分けて士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして正直なるべし。もし【私欲】あらば、其の所は常闇なり。又農工商も家の主は家内の頭なり。もし【私欲】あらば 家内が常闇となる。すべて物の頭となる者は可慎事なり。然るに欲心に覆われ、此の正直を行わずして、浅ましき交わりになり行くは悲しきことなり。

人の頭（かしら）となるものこそ、私欲を排し、「正直」でなければならない。

かるがゆえに十五年このかた、其の【私欲】を離るゝことを説き来れり。【私欲】ほど世に害を為すものはあらず。

私欲とは、「自分の利益だけをはかろうとするいやしい欲望」であり、世の中に害を及ぼす「悪」である。これに対して正直は、世の中を和合させる「善」なのである。

此の味わいを知らずして為す儉約は、皆吝きに至り、害をなすこと甚だし。我言う所は正直より為す儉約なれば、人を助くるに至る。

「人を助ける」ことは、惻隱の心を素にした「仁の実践」に他ならない。
ゆえに、「正直より為す、人を助けるための儉約」は、「善」である。

反対に、「自分のためだけになる儉約」は、単なるケチにすぎず、害をなす「悪」である。

子曰「人の生るは直なり。罔て生るは幸いにして免れたり。」とのたまえり。是を以て見れば、不直にして生けると言えども 死人に同じ。おそるべきことなり。

梅岩は、孔子の言葉を引用している。「人が生かされているのは、正直に生きているからである。もし、曲がって生きていられる人がいたとしたら、それは偶然に災難を免れているだけである」不正直に生きているならば、それは死人と同じであり、生きている価値さえない。

感情による悪とは何か

「悪を成す理由」として、以下の3つを掲げた。

- ① 自らの欲望を優先し、自分の意思で悪を成す。
- ② 自らの感情に左右され、かっとなって思わず悪を成す。
- ③ 道徳を知らず、悪が分からずに悪を成す。

今まで「人欲、欲心、私欲」という3つの「欲」を解説してきたが、これは①に該当するものである。

また、③は「善悪がわからない」という点で、教育の不足であり、「是非の心」の未熟さでもある。子供が悪さをする場合など、これに該当する。

梅岩の悪の解説のほとんどは「欲」であり、「感情」を基にした悪の解説は2つしかない。

- ① 人は【喜怒哀楽の情】に因て、天命に背く。故に教えをなして人の道に入れしむ。
- ② 【七情】に蔽い昧まされて、聖人の知を外に替わりたることある（性理問答の段）

この中で、①は「浄土宗之僧 念仏を勧るの段」、②は「性理問答の段」である。これらに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 人は【喜怒哀楽の情】に因て、天命に背く。故に教えをなして人の道に入れしむ。

朱子曰 自天降生民 則既莫不与之 以【仁義礼智之性】矣。然其【氣質】之稟或不能齋

梅岩学の基礎となったのは「朱子学」である。ゆえに、ここでも朱子の言葉を掲げている。現代語訳は、次の通りになる。

天がその生民を下す時には、必ず全てに【仁義礼智の性】を与えている。しかし、気質（生まれつきの性格や性質）によっては、いくら努力しても悪い癖や習慣を完全に克服できないことがある。

「孟子の性善説では悪の起源を十分に説明することができない」と考えた朱子は、人の性を「本然の性」と「気質の性」とに分け、この問題を解決しようとした。

朱子の言葉の中の「気質」は、「気質の性」のことであり、これが「悪の原因となりえる」と、朱子学では教えている。このことを理論ベースとして、梅岩は次のように述べてゆく。

今日 人に生れたる者には五常五倫の教えあり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行い【仁義礼智の性】を全うし 天命に至らしむる教えなり。草木は天に違わざるに因て教えは不入。人は【喜怒哀樂の情】に因て、天命に背く。故に教えをなして人の道に入れしむ。

ここでは、「仁義礼智の性」だが、そのまま「仁義礼智の良心」として理解して良い。天命に沿い、良心に従うのが「善」である。反対に天命に背き、良心に反するのが「悪」である。

その原因が「喜怒哀樂の情」であると、梅岩は言う。

朱子の言う通り、感情そのものは「悪」ではない。しかし、時に「悪の原因」となるものである。

② 【七情】に蔽い味まされて、聖人の知を外に替わりたることある（性理問答の段）

朱子学においては、「気質の性が、七情を生み出し、悪の原因になりえる」と説明している。ゆえに、①において梅岩が「喜怒哀樂の情」と述べているが、本来はここも「七情」とすべきだろう。

「七情」とは、「七情とは、喜・怒・哀・楽・愛・悪（にくしみ）・欲」の7つである。すなわち、6つの感情と欲であるが、「欲」に関しては、既に十分に説明した。

6つの感情の中でも、最も「悪」になりやすいものは、「怒」と「悪（にくしみ）」であろう。

仏教における三毒

仏教では、「三毒が、人間の諸悪・苦しみの根源」とされている。この三毒とは、次のとおりである。

貪欲（とんよく）：むさぼり、度を越えた欲の深い心。

瞋恚（しんに）：怒り、憎しみ、恨み。

愚癡（ぐち）：真理に対する無知。おろかさ。

「悪を成す理由」として、以下の3つを掲げたが、この三毒そのままである。

- ① 自らの欲望を優先し、自分の意思で悪を成す。(貪欲)
- ② 自らの感情に左右され、かっとなって思わず悪を成す。(瞋恚)
- ③ 道徳を知らず、悪が分からずに悪を成す。(愚癡)

梅岩もまた、悪の原因として「欲」(人欲、欲心、私欲)を掲げ、「感情」(喜怒哀楽、七情)を掲げた。さらには、梅岩二書を通じて、人の道を教え、善を教えて、「愚癡」からの脱却を促している。

梅岩二書における「悪」は、仏教における「三毒」と共通しているのである。

梅岩学における悪

最後に、梅岩学における「悪」とは何か、あらためてまとめたい。

- ① 名聞(過剰な名誉欲)
- ② 利欲(過剰な金銭欲)
- ③ 色欲(過剰な性欲)
- ④ 人欲(人間の欲望)
- ⑤ 欲心(強欲な心、主に金銭欲)
- ⑥ 私欲(自分の利益だけをはかろうとするいやしい欲望)
- ⑦ 感情による悪(恨み、憎しみ、怒り)

これらの中で、特に「金銭欲」が目立つ。

犯罪の多くも、様々な人間関係のトラブルも、金銭欲が原因となる場合が多いだろう。

この金銭欲を解決する方法こそが、梅岩の代名詞「儉約」なのであるが、この詳細は後述する。

梅岩学における善とは何か

前章「悪とは何か」において、梅岩二書における「悪」を徹底的に明確化してきた。

「善」には、次のような2段階があるだろう。

- ① 悪を成さない。
- ② 善を積極的に成してゆく。

「悪とは何か」を明確にしてきたのは、①の段階を実践するためである。

何が悪であり、何が悪の原因になりえるのかを知って初めて、悪を避けることができる。

本章では、②の「善を積極的に成してゆく」ために、梅岩二書における「善とは何か」を明らかにしてゆく。

仁義礼智は何か

四端を端として、仁義礼智となる。ならば、仁義礼智とは、「四端に従い、実践すること」ではないか。これはすなわち「良心に従う」「性に率（したが）う」ことにもなる。

仁：惻隱に従い、他者を愛し憐み、助ける。

義：羞惡に従い、不義不正をしない。悪を許さず悪と戦う。

礼：辞讓に従い、礼儀を尽くして、人間関係を潤滑にする。

智：是非に従い、智慧を尽くして、善悪を判断する。

井戸に落ちそうな子供を見たとき、それは惻隱の心が発して、子供助けようと行動する。これが「仁」であり、「惻隱に従い、他者を憐み助ける」実践である。

万引きなどの犯罪を見たときは、これを咎め、犯人を確保しようとする。これが「義」であり、「羞惡に従い、悪を許さず悪と戦う」実践である。

人と出会ったときは挨拶し、助けてもらったときは、感謝の言葉を述べる。これが「礼」であり、「辞讓に従い、礼儀を尽くして、人間関係を潤滑にする」実践である。

何か問題が起こったときに、これを正しく判断し、的確な対処を行う。これが「智」であり、「是非に従い、智慧を尽くして、善悪を判断する」実践である。

この4つをまとめて、「良心に従う」という。

惻隱に従わず、他者を憐み、助けない者は「仁」に至らない。

羞惡に従わず、悪や不正を許す者は「義」に至らない。

辞讓に従わず、挨拶や感謝を示さない者は「礼」に至らない。

是非に従わず、正しい判断ができない者は「智」に至らない。

さて、「仁義礼智」は、都鄙問答に8回、書かれている。(齊家論にはない)

① 人倫の大原は天に出て、【仁義礼智の良心】よりなす。

- ② 【仁義礼智の良心】は、其の五倫を行なわする心なり。
- ③ 平坦清明の気より、【仁義礼智の良心】を生ずることを不知。
- ④ 儒には【仁義礼智】信の五常、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の五倫とを天の道とし天人一致とす。
- ⑤ 聖人も天地の心を得て、私心なく無心の如くなれども、【仁義礼智】行なわる。
- ⑥ 朱子曰 自天降生民 則既莫不与之 以【仁義礼智之性】矣。然其氣質之稟或不能齋
- ⑦ 【仁義礼智の性】を全うし 天命に至らしむる教えなり。
- ⑧ 人と生るれば、【仁義礼智の性】は、古今相い続いて不変。

この中で、①は「都鄙問答の段」、②～⑤は「性理問答の段」、⑥⑦は「浄土宗之僧 念仏を勧るの段」、⑧は「或人天地開闢の説を譏るの段」。

仁義礼智の良心は、全て「良心とは何か」で説明しているため、ここでは省く。
また、④は次の「五常五倫とは何か」で説明しているため、これも省く。

以降、⑤～⑧に関して、説明してゆく

- ⑤ 聖人も天地の心を得て、私心なく無心の如くなれども、【仁義礼智】行なわる。

聖人には私心（自分の利益ばかりを考える心）がない。

ゆえに「無心」のように見えるが、「仁義礼智の良心」は存在し、善は行われる。

- ⑥ 朱子曰 自天降生民 則既莫不与之 以【仁義礼智之性】矣。然其氣質之稟或不能齋
- ⑦ 【仁義礼智の性】を全うし 天命に至らしむる教えなり。

朱子の言葉⑥を、詳細に説明したのが⑦であり、その文が以下のとおりである。

今日 人に生れたる者には五常五倫の教えあり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行い 仁義礼智の性を全うし 天命に至らしむる教えなり。

まず、「仁義礼智の性」とは、「仁義礼智の良心」と一切変わらない。

人には必ず、仁義礼智の性（良心）があるゆえに、天命に至ることができる。

- ⑧ 人と生るれば、【仁義礼智の性】は、古今相い続いて不変。

人として生まれたのであれば、必ず仁義礼智の性（良心）がある。これは永遠に変わることがない。

さて、仁義礼智を短縮した「仁義」は、都鄙問答に16回、齐家論に1回、書かれている。
その中で、代表的なもののみ、以下に示す。

- ① 名利の勝つ者は、必ず【仁義の心】薄し。孝行は【仁義の心】よりなす者なり。
- ② 孟子曰 尚志、何謂尚志 【仁義】而已。
- ③ 君子に【仁義】有りて、【仁義】を以て身を賊ふと譏れり。
- ④ 性善を会得すれば、気も亦清明にして、【仁義の良心】を発す。
- ⑤ 其差惡の心を推して知らば、【仁義の良心】に至るべし。
- ⑥ 己を顧て【仁義の志】有りて止まざるを聖人の学問と云う。

この中で、①は「孝の道を問の段」、②は「武士の道を問の段」、③は「禅僧 俗家の殺生を譏るの段」、④⑤は「性理問答の段」、⑥は「学者の行状 心得難きを問うの段」

仁義の良心は、全て「良心とは何か」で説明しているため、ここでは省く。

- ① 名利の勝つ者は、必ず【仁義の心】薄し。孝行は【仁義の心】よりなす者なり。

其名聞あれば、利欲も甚多からん。名利の勝つ者は、必ず仁義の心薄し。孝行は仁義の心よりなす者なり。

名聞は「名誉欲」、利欲は「金銭欲」である。また、仁義の心は、「仁義の良心」である。名誉欲や金銭欲が強いものは、仁義の良心が薄い。親孝行は、仁義の良心によって成すものなのだ。

- ② 孟子曰 尚志、何謂尚志 【仁義】而已。

武士の道を示すために、梅岩は孟子の言葉をもって語る。「志とは、仁義のみ」だと。

- ③ 君子に【仁義】有りて、【仁義】を以て身を賊ふと譏れり。

仁義が7回も使用されている部分である。以下、原文と現代語訳を掲載する。

汝如き法に昧き僧多き故に、徒然草に僧に法有りて、法を以て身を賊ひ、又君子に【仁義】有りて、【仁義】を以て身を賊ふと譏れり。君子は【仁義】あるに由りて、君子といふに、如何なる事ぞと、眼をつけて見ば、孟子の舜は由【仁義】行 非行【仁義】也との玉うこと明らかならん。無極の眞を体とし玉う外に、【仁義】と云う名目あらんや。無我の舜 なんぞ【仁義】を期にして行ひ玉うべき。

梅岩は、ある僧を叱って次のように言う。

『お前は、多くの殺生をして身命をつないでおきながら、俗人が祝儀のために生き物を殺すのは浅ましいと言う。仏の本意を理解せずに、他人を批判するのは大きな罪である。お前のように法を知らな

い僧侶が多いから、徒然草では「僧侶には法があって、法によって身を損ない、また君子には仁義があって、仁義によって身を損なう」と批判されているのだ。

「君子は仁義があるから、君子と呼ばれる」と言われるが、と目を凝らして見てみると、孟子が「(舜は) 仁義によって行ったのであり、仁義を行ったのではない。」と言っていることが明らかだろう。宇宙の根源の真を本体とされる以外に、仁義という名目があるだろうか。無我の舜が仁義を目標に行動するはずがない。』

⑥ 己を顧て【仁義の志】有りて止まざるを聖人の学問と云う。

以下、原文と現代語訳を掲載する。

我心を得れば父母には孝行をなし、他人には偽りをいわず。詐りをいわざれば、出入等に不埒はなさず。返す覚えなきものは不借。飢えて死すとも不義の物を受けず。己が欲せざる所を人に施さず。我才能を以て人に伐らず。他人の善事を身にうつし、人の悪事を見ては、我にもこの悪事あらんかと恐れ、己を顧て【仁義の志】有りて止まざるを聖人の学問と云う。

「自らの良心」を得れば、親に孝行し、他人に偽り（詐り）を言わず、返せない借金はしない。仮に飢えて死んだとしても、不正なものは受け取らない。他人が嫌がることをしない、自分の才能を誇らない。他人の善きことを真似て、悪しきを反省する。このように「仁義の志」が止まないことを「聖人の学問」という。

五常五倫とは何か

梅岩学における「善」の代表格こそ、五常と五倫である。

五常は「仁義礼智信」であり、『孟子の四端説における「仁義礼智」の四徳に対し、前漢の董仲舒は五行説にもとづいて「信」を加えた』（Wikipedia 五常）。

「仁義礼智」のあるものは、人との約束を守り、人を信頼し、人から信頼される。それが「信」であろう。「仁義礼智」は、「良心」であるため、「五常」もまた、「良心」である。

五倫は「中国において、人の重んずべき五つの人間関係をいう。父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信をいう。」（世界大百科事典）

五常と五倫は、「五常五倫」と一緒に言われている部分も多い。以下はこれも含めてをカウントした。

「五常」は、都鄙問答に9回、書かれている。(齐家論にはない)

「五倫」は、都鄙問答に13回、齐家論に1回、書かれている。

この中で、重要と思われるもののみ、以下に掲げる。

- ① 【五倫】の道を教え、天の命ぜる職分を知らせ、力行ときは、身修まりて家齊い
- ② 性を知る時は、【五常五倫】の道は其中に備れり。
- ③ 只心を尽して【五倫】の道を能くすれば、一字不学といふ共 是を実の学者と云う。
- ④ 【五倫五常】の道を以て、我より以下の人に、教えんことを志すと云う
- ⑤ 【五常五倫】の道は、天下國家を治むるも一列なり。此故に小家といえども教えあり。
- ⑥ 仁義礼智の良心は、其の【五倫】を行なわする心なり。
- ⑦ 儒には仁義礼智信の【五常】、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の【五倫】とを天の道とし天人一致とす。
- ⑧ 今日 人に生れたる者には【五常五倫】の教えあり。
- ⑨ 吾が志を述べんと思えり。願う所は一人なりとも【五倫】の交わりを知り

この中で、①～④が「都鄙問答の段」、⑤が「或学者 商人の学問を譏るの段」、⑥⑦が「性理問答の段」、⑧が「学者の行状 心得難きを問うの段」、⑨が齐家論である。

これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 【五倫】の道を教え、天の命ぜる職分を知らせ、力行ときは、身修まりて家齊い

聖人は人倫の至りなり。如是君子大徳の行跡を見、此を法として、五倫の道を教え、天の命ぜる職分を知らせ、力行(つとめおこなう)ときは、身修まりて家齊い、国治まりて天下平かなり。

五倫とは、5つの人倫(正しい人間関係)とも言え、聖人はこれを極めている。

五倫と天命の職分(天職)を知り、勤勉にこれを行うことで、「修身・齐家・治国・平天下」が成される。

「修身・齐家・治国・平天下」するため、「大学」ならば「格物・致知・誠意・正心」の4段階が必要なのであるが、梅岩は「自らの仕事を天職として励むこと」で成されるという。

これこそ「町人の哲学」であろう。

- ② 性を知る時は、【五常五倫】の道は其中に備れり。

孟子の性善において「性を知る」とは、「良心を知る」ということである。五常(仁義礼智信)は、「良心の作用」であり、さらに五倫は「五常を基に生み出される、良き人間関係」の事である。

- ③ 只心を尽して【五倫】の道を能くすれば、一字不学といふ共 是を実の学者と云う。

一字不学であっても「実の学者」であるというのは、梅岩自身を示しているのであろう。
書を読むよりも大切なことは、五倫の実践である。

- ④ 【五倫五常】の道を以て、我より以下の人に、教えんことを志すと云う

師である小栗了雲に「お前は何のために学問をするのだ」と聞かれ、梅岩が述べた場面である。
梅岩の志は、「自分より下の者に対して、五倫五常の道を伝えること」なのである。

- ⑤ 【五常五倫】の道は、天下國家を治むるも一列なり。此故に小家といえども教えあり。

天下國家を治めるのも、我が家を斉（おさ）めるのも、わが身を修めるのも、すべて「五常五倫の道」が基本となる。

- ⑥ 仁義礼智の良心は、其の【五倫】を行なわする心なり。

「仁義礼智の良心」は、五倫実践の元となる。
また、「五倫」という言葉の裏には、言わずとも「五常（仁義礼智信）」の存在がある。

- ⑦ 儒には仁義礼智信の【五常】、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の【五倫】とを天の道とし天人一致とす。

「天の道」とは、五常五倫の道に外ならず、「天人一致」は、五常五倫の実践により成される。
五常の中心にある「良心」は、天に通じているのである。

- ⑧ 今日 人に生れたる者には【五常五倫】の教えあり。

今日 人に生れたる者には五常五倫の教えあり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、兄弟の序、朋友の信、これを能く行い 仁義礼智の性を全うし 天命に至らしむる教えなり。

前述もしたが、「仁義礼智の性」とは、「仁義礼智の良心」である。これを全うすれば、「天命」に至ることができる。

- ⑨ 吾が志を述べんと思えり。願う所は一人なりとも【五倫】の交わりを知り

もし聞く人なくば、たとえ辻立ちして成りとも 吾が志を述べんと思えり。願う所は一人なりとも五倫の交わりを知り、君に事うる者ならば 己を忘れ身をゆだね、苦勞をかえり見ず、勤むべきことを

先とし、得ることを後にするの忠を尽くす人いで、また父母に事うるに親しく愛しまいらせ、常々喜べる顔色あって、身のとりまわしは柳の風になびくが如く、むつまじく事うるの孝を尽くす人いできたらば、これ生涯の楽しみなり。たとえ千万人に笑われ、恥を受くとも、厭うことなき志なり。

辻立ちし、千万人に笑われ、恥を受けることがあったとしても、実現したい願い。それが「一人でも良いから五輪の道を知り、実践してほしい」である。師である小栗了雲に出会ってから、20年近くたつが、梅岩の志は何1つ変わっていない。

「君主に仕えるときは、己を忘れ、苦勞をかえり見ずに勤める。得ることを後にし忠を尽くす。父母には親愛の情と笑顔をもって孝を尽くす」。

自らの教えから、このような人物が一人でも現れること、梅岩の「生涯の楽しみ」である。

道心と仁心

梅岩は、時に「道心」「仁心」という言葉を使用している。

その意味は、次のとおりである。(いずれも、日本国語大辞典より引用)

道心とは、「ことの善悪、正邪を判断し、正道を行なおうとする心。道徳の心。〔書経 - 大禹謨〕」

仁心とは、「深い愛情をもって思いやる気持。人を愛する心。」

道心は「是非の心」に近いものであるし、仁心はそのまま「仁の心」でもある。

ゆえに、「四端と仁義礼智」である良心は、この2つを内包するものとなるであろう。

以降において、まず「道心」を説明し、次に

「道心」は、都鄙問答に3回、書かれている。(齊家論にはない)

「仁心」は、都鄙問答に3回、齊家論に1回、書かれている。

- ① 道は【道心】と云うて心なり
- ② 旧染の人欲出て行い難し。行なわざれば心を欺むき、【道心】と人心と戦うゆへに中を苦しむ。
- ③ 不義は行ふまじきと思へども、修行の功なきゆへに、人心と【道心】と雜りて分かれず。
- ④ 商人の道を知れば、欲心を離れ【仁心】を以て勉め、道に合うて栄ゆるを学問の徳とす。
- ⑤ 聖人の【仁心】能々味ふべき所なり。聖人斯のごとく不善を悪み玉う
- ⑥ 人の命を惜しむ【仁心】ありて、薬をほどこし、且病治せざるは是非なしとも云うべし。
- ⑦ 不学者は見聞く所の欲にひかれ、固有せし【仁心】を見失ひ、これを求むることを知らず。

道心の全て(①～③)は「都鄙問答の段」、仁心の④⑤は「或学者 商人の学問を譏るの段」⑥は「医の志を問うの段」、⑦は「齊家論」である。

全体を通してみるに、「道心と人心」、「仁心と欲心」が対義語として使用されている。
これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

① 道は【道心】と云うて心なり

これは梅岩自身の言葉ではなく、師の小栗了雲が梅岩に語った言葉である。
梅岩二書にも「道」が、数多く使用されるが、その本質はあくまで「心」と説明している。
前述で、孟子は「道は性善のみ」と説いた。ゆえに、道心とは「性善の心」であり、「良心」なのである。

② 旧染の「人欲」出て行い難し。行なわざれば心を欺むき、【道心】と人心と戦うゆへに中を苦しむ。

人心とは、「人間がふつうに持っている、人間としての心。」(日本国語大辞典)であるが、「道心」の対義語としての使用であるため、この前に使用されている「人欲」に近いものと捉えるべきであろう。

「善なる道心」は悪を嫌う。ゆえに「悪なる人心」と対立し戦う。ゆえに人は苦しむ。

③ 不義は行うまじきと思へども、修行の功なきゆへに、人心と【道心】と雜りて分かれず。

良心は最初から完成されたものでなく、四端から仁義礼智に成長するものである。
ゆえに、良心を養うための修行が必要であるが、修行が足らなければ、人欲に従う「人心」と、良心に従う「道心」を適切に見分けることができない。これは「是非の心が育っていない」とも言える。

④ 商人の道を知れば、欲心を離れ【仁心】を以て勉め、道に合うて栄ゆるを学問の徳とす。

商人は、自己の利益を優先する「欲心」に従ってはならない。
良心に従い、相手(仕入先や顧客)を思いやり、「先も立ち、我も立つ」商売をすべきなのである。

⑤ 聖人の【仁心】能々味ふべき所なり。聖人斯のごとく不善を悪み玉う

聖人の【仁心】能々味ふべき所なり。聖人斯のごとく不善を悪み玉う、味わいを知らば二重の利を取り、二升の似をし、密々の礼を請ること杯は危うして、浮る雲の如くに思うべし。是を能々つゝしむは只 学問の力なり。世間のありさまを見れば、商人のように見えて盗人あり、実の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり。紛れものは人をだまして其座を済ます。是を一例に云うべきにはあらず。

聖人は良心に従うので、不善を嫌う。このように、二重の利を得るなどの不正をしないのは「学問の力」によるものである。

他人を騙し、欺いて商売を行う者は、「商人のように見える盗人」であり、良心に従わない。良心に従い、「先も立ち、我も立つ」ことを思って商売する者こそが、「真の商人」でなのである。

- ⑥ 人の命を惜しむ【仁心】ありて、薬をほどこし、且病治せざるは是非なしとも云うべし。

医は仁術なり。まず何よりも「人の命を惜しむ仁心」なくして、真の医者にはなりえない。その覚悟を持って、医学万卷を学ぶ。患者の痛みを我が痛みとして理解し、適切な薬で治療する。それでもなお、治せないとしたならば、その時こそ「天命」とあきらめることができる。

- ⑦ 不学者は見聞く所の欲にひかれ、固有せし【仁心】を見失い、これを求むることを知らず。

不学者は見聞く所の欲にひかれ、固有せし【仁心】を見失い、これを求むることを知らず。知らざればことごとく不仁となる。不仁となるものを【放心】と言う。

「固有せし仁心」は、「固有せし良心」そのものである。
放心とは、「良心を見失った状態」であるが、見失った良心を求めることさえ知らなければ、ことごとく不仁となる。

儉約とは何か

悪を成さず、善を積極的になすための手段として、梅岩が提示したものが「儉約」である。

孟子は「恒産なくして恒心なし」と言われている。「凡人は一定の生業や財産（恒産）が無いと、一定不変の道德心（恒心）を保つことができない」との意味だが、現実には、大多数の人間がこの通りであろう。

日々の生活が安定し、「金銭に心配がない」状態であってこそ、道德に従い、良心に従うことができる。日常生活ができないほどに金銭に困れば、良心に反して悪をなす人間も増えてしまう。

「儉約」の功績は、収入が多くない場合でも、「恒産あり」の状態に保つことである。さらに、収入が多くして、儉約するのであれば、貯めた金銭で「人を救う」という善を成すこともできる。

儉約とは、「善の実践論」なのである。

「儉約」は、都鄙問答に8回、齊家論に37回書かれている。
以下、重要なもののみ書き出したが、それでも相当に数が多い。

- ① 如此ならば天下公の【儉約】にもかない、天命に合い福を得べし。
- ② 【儉約者】を好むは尤なり。国家を治むるも 約を本とするにあらずや。
- ③ 【儉約】と云うを 世に誤って吝わきことゝ思うは非なり。
- ④ 身分相応を知れば 【儉約】が常となるなり
- ⑤ 財宝を用ゆること【儉約】にすると、人の愛するの理備われり。
- ⑥ 然れば家・国を治むるには、【儉約】は本なること明らかなり
- ⑦ 【儉約】は財宝を節く用い、我分限に応じ、過不及なく
- ⑧ 吝きことなく【儉約】を守り、一人の小者、又は出入り従う者を憐れみ助けたき志なり。
- ⑨ 【儉約】のことを得心し行ふ時は、家斉い、国治まり 天下平らかなり。
- ⑩ 農工商を言えば士に通う。なんぞ四民の【儉約】を 別々に説くべきや
- ⑪ 【儉約】を言うは他の儀にあらず、生まれながらの正直に還したき為なり。
- ⑫ 此の味わいを知らずして為す【儉約】は、皆吝きに至り、害をなすこと甚だし。
- ⑬ 予言う【儉約】は・・・全て私曲なく、心を正しうする様に教えたい志なり。

この中で、①は「商人の道を問うの段」、②③は「或人主人行状の是非を問うの段」、④以降は、すべて齊家論である。以降、これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 如此ならば天下公の【儉約】にもかない、天命に合い福を得べし。

欲心なくして一銭の費を惜しみ、青戸左衛門が五拾銭を散して、十銭を天下の為に惜まれし心を味わうべし。如此ならば天下公の【儉約】にもかない、天命に合い福を得べし。

自らの50銭を使って、川に落ちた10銭を探させた青戸左衛門。

このようにするならば、天下の儉約となり、天命に適うので、福を得ることができる。

- ② 【儉約者】を好むは尤なり。国家を治むるも 約を本とするにあらずや。

是誠の道を以て人を遣うなれば、忠あるものを求得ること多からん。子曰以約失之者鮮矣と。【儉約者】を好むは尤なり。国家を治むるも 約を本とするにあらずや。仮令財宝ありとも、善人を得ずは何を以家を治めんや。

人を雇うならば、忠義ある者、儉約する者を選ぶ。国を治める場合でも、儉約が本になるからだ。たとえ財宝があっても、善人でなければ、家を治めることができない。

- ③ 【儉約】と云うを 世に誤って吝わきことゝ思うは非なり。

聖人の【約】を本とし 奢りを退け玉うは、凶年などの時は 溜置ける財宝を国々へ布き施こさんと思召、民の為の【儉約】なることを知るべし。如斯類を法として 下々も一家の頭たる者は、親類中を

我家の如く思い、難儀あれば救うことを、我役目と思う者ならば、平常【儉約】を思うより外に心は有るまじ。【儉約】と云うを世に誤って吝わきことゝ思うは非なり。聖人の【約】との玉うは奢りを退け法に従ふことなり。

都鄙問答における「儉約」は、「或人主人行状の是非を問うの段」に集中している。

この中でも特に重要なのは、「儉約」が繰り返されるこの部分であろう。以下、現代語訳する。

聖人が「儉約」を本にして奢りを退けるのは、凶作の年に貯めおいた財宝を施すためである。すなわち、「民のための儉約」であることを知らなければならない。これを「法」として、一家の主たるものは、親戚中を我が家のごとく思い、難儀があれば助けるべきである。これを実行するには「平常の儉約」以外に方法はない。儉約を「ケチ」と思うのは、世間の大きい誤りだ。聖人の儉約とは、奢りを退けて、法に従うことである。

「儉約」し、財宝があつてこそ、他人を憐み、助けるという「仁」を実践できるのである。

④ 身分相応を知れば【儉約】が常となるなり

それがし嘗って著わす都鄙問答、「或る人主人行状 是非を問うの段」に言い置きしは、始終【儉約】を行うことなれど、それと題号なき故、門弟も心付きなかりしに【儉約】が常なることを得心し、このたび改め行えり。其れ故 家内の者も珍しきことと思えるなり。向後 身分相応を知れば【儉約】が常となるなり。

前項で示した通り、梅岩は「或人主人行状の是非を問うの段」にて、「儉約」をしっかりと伝えている。しかし、都鄙問答の中においては、決して目立つものではなかった。

ゆえに梅岩は、齊家論を著したのである。「儉約齊家論」と言われるゆえんもここにある。齊家論はわかりやすく、実践しやすいこともあり、思う以上に売れたとの記録も残っている。

⑤ 財宝を用ゆること【儉約】にする中に、人の愛するの理備われり。

⑥ 然れば家・国を治むるには、【儉約】は本なること明らかなり

(孔子は)「国を治るには、用を節にして民を愛す」とのたまう。財宝を用ゆること【儉約】にする中に、人の愛するの理備われり。人を愛せんと欲すとも、財用足らざれば不能。然れば家・国を治むるには、【儉約】は本なること明らかなり。

「国を治めるには、費用を節約し、民を愛するべきだ」と孔子は言われた。儉約には、人を愛する「理」が備わっている。人を愛そうとしても、金銭なくしてはできないからだ。家や国を治めるときも、「儉約」が本になることは明らかなだ。

⑦ 【儉約】は財宝を節く用い、我分限に応じ、過不及なく

実に徒然草にも「世を治る道は、【儉約】を本とす」と言えり。蓋し【儉約】と云事、世に多く誤り、吝きことと心得たる人あり。左にはあらず。【儉約】は財宝を節く用い、我分限に応じ、過不及なく、物の費え捨つることを厭い、時にあたり法にかなう様に用ゆること成るべし。

「儉約」を世間では、「ケチ」と考える人が多いが、間違っている。

「儉約」とは、自分の分限に応じて、金銭を程よく、過不足なく使うことなのだ。

また、物をムダに費やし捨てることを嫌い、時に応じ、法に適って使うことだ。

⑧ 吝きことなく【儉約】を守り、一人の小者、又は出入り従う者を憐れみ助けたき志なり。

さて、此の御高恩を如何して報じ奉つるべきや。明らかに知らねども、我が身を治め、上を犯すことなき様に慎しみ、父子・夫婦・親類・縁者、家の小者に至るまで、互いに睦まじく打ち和らぎ、吝きことなく【儉約】を守り、一人の小者、又は出入り従う者を憐れみ助けたき志なり。

江戸時代となり、天下泰平で安穏と暮らせるのは、国家の仁政ゆえである。

では、「御高恩」に報いるには、如何にすべきか。

わが身を修め慎み、父子・夫婦・親類・縁者、家の使用人に至るまで、互いに仲睦まじく和する。ケチではない「儉約」を守ること、使用人や出入りのものまでも、憐れみ助けたいという志を持つ。

「父子・夫婦・親類・縁者、家の使用人に至るまで、互いに仲睦まじく」は、五倫の実践であり、「一人の使用人や出入する者も、憐れみ助けたい」は、仁の実践である。

梅岩は、「儉約を手段として、五常五倫の道を実践すべき」の意を含めて述べているのであろう。

⑨ 【儉約】のことを得心し行う時は、家斉い、国治まり 天下平らかなり。

上より下に至り、職分は異なれども 理は一なり。【儉約】のことを得心し行う時は、家斉い、国治まり 天下平らかなり。これ大道にあらずや。【儉約】を言うは畢竟 身を修め家を斉えん為なり。大学にいわゆる 「天子より庶人に至るまで、一に是 身を修むるを以て本とす」と。

「大学」の八条目は「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」である。

梅岩は「格物・致知・誠意・正心」を、「儉約」1つで代わりとした。

忙しく仕事をする身であれば「格物・致知・誠意・正心」を現実的に行うのは、極めて難しい。しか

し、梅岩はこれを「儉約」のみとした。極めて現実的な「学問の実践」の提示なのである。

「儉約」を得心することで、「身を修め、家斉い、国治まり、天下平らかを実現できる」という。まさに「上から下まで、職分が異なっても、理は1つ」であり、「大道」に他ならない。

- ⑩ 農工商を言えば士に通う。なんぞ四民の【儉約】を 別々に説くべきや
- ⑪ 【儉約】を言うは他の儀にあらず、生まれながらの正直に還したき為なり。

故に士農工商各々職分異なれども、一理を会得する故、士の道を言えば農工商に通い、農工商を言えば士に通う。なんぞ四民の儉約を 別々に説くべきや。儉約を言うは他の儀にあらず、生まれながらの正直に還したき為なり。

「儉約」は、すべての人間に共通する「五常五倫」実現のための手段である。しかしながら、「儉約」の真の目的は、「生まれながらの正直」に還ることである。

- ⑫ 此の味わいを知らずして為す【儉約】は、皆吝きに至り、害をなすこと甚だし。

かるがゆえに十五年このかた、其の私欲を離るゝことを説き来れり。私欲ほど世に害を為すものはあらず。此の味わいを知らずして為す【儉約】は、皆吝きに至り、害をなすこと甚だし。我言う所は正直より為す【儉約】なれば、人を助くるに至る。

道を教え始めて15年。常に「私欲」を離れよと説き続けてきた。私欲ほど、世に害をなすものはないからだ。それを理解せずに「儉約」しても、結局は「ケチ」に過ぎず、逆に害をなす。梅岩の言う「儉約」は、正直からなされるものであり、人を助けるものである。

自分のため（＝私欲）に行うなら、ケチにすぎない。

「正直からなされる儉約」であってこそ、他人を助ける（＝仁の実践）ことができる。

- ⑬ 予言う【儉約】は・・・全て私曲なく、心を正しうする様に教えたく志なり。

予言う【儉約】は ただ衣服・財器のことにのみならず。全て私曲なく、心を正しうする様に教えたく志なり。

梅岩の儉約は、ただ物を大切にすることではない。「心を正しくする」ことが目的なのである。

儉約の目的は、以下のとおりである。

- ① 生まれながらの正直に還る。

- ② 他者を愛し助ける、仁の実践。
- ③ 修身・齐家・治国・平天下の実現。

正直とは何か

梅岩曰く「我言う所は【正直】より為す【儉約】なれば、人を助くるに至る。」
仁義礼智の素が四端であるように、「儉約」の素となるものは「正直」なのである。

一般的な「正直」は、「正しくて、うそや偽りのないこと。また、そのさま。」
しかし、「梅岩学における正直」は、このような正直とは一線を画すものである。これらを明らかにする。

「正直」は、都鄙問答に 12 回、齐家論に 29 回書かれている。
以下、重要なもののみ書き出したが、それでも相当に数が多い。

- ① 商人は【正直】に思はれ打解たるは、互に善者と知るべし
- ② 直に利を取るは商人の【正直】なり。利を取らざるは商人の道にあらず。
- ③ 儉約を言うは他の儀にあらず、生まれながらの【正直】に還したき為なり。
- ④ この【正直】行わるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟の如し。
- ⑤ 我言う所は【正直】より為す儉約なれば、人を助くるに至る。
- ⑥ 分けて士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして【正直】なるべし。
- ⑦ 【正直】を守らんと思わば、先ず名聞利欲を離るべし。
- ⑧ 人の心は自然に慈悲・【正直】なる所あれば
- ⑨ 予はこの惻隱の心の発る所を 直に行うを【正直】という。

この中で、①②は「或学者 商人の学問を譏るの段」、④以降は、すべて齐家論である。
以降、これら 1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 商人は【正直】に思はれ打解たるは、互に善者と知るべし

我より人の実不実をみる如く、他よりも又、我実不実を見ることを知らず。伝曰人視己如見其肺肝と。
此理を知れば辞を飾ずありべかりに云うゆへに、【正直】ものなりと、何事も任せ頼るゝゆへに、
世話なしに人一倍も売ものなり。商人は【正直】に思はれ打解たるは、互に善者と知るべし、此味は
学問の力なくては知れざる所なり。然るを商人は学問はいらぬものと云うて嫌ひ、用ざることは如何
なることぞや。

「商人の学問」を罵る「ある学者」に対し、梅岩は反論してゆく。

梅岩は「自分が他人の実・不実を見抜くように、他人も自分の実・不実を見抜くのだから、言葉を飾らずに、ありのままに言う『正直者』になるべきだ」という。

正直者ならば、何事も頼られ任せられる。そうなれば、手間をかけずとも、人一倍売れるようになる。商人が正直と思われ、客と打ち解けられるなら、(商人と客は)互いに「善者」であることを知る。

この味わいは、学問の力なしに知ることはできない。

それなのに、「商品に学問はいらない」と言って嫌い、使わないのは間違っている。

② 直に利を取るは商人の【正直】なり。利を取らざるは商人の道にあらず。

商人は左の物を右へ取り渡しても、直に利を取るなり、曲て取るにあらず。口入ばかりする商人を問屋と云う、問屋の口銭を取るは、書き付けを出し置けば人皆これを見る。鏡に物を移すが如し。隠す処にあらず、直に利を取る証なり。商人は直に利を取るに由て立つ。直に利を取るは商人の【正直】なり。利を取らざるは商人の道にあらず。

商人が商品を「左から右へ」売り渡したとしても、「直に利を取る」のであって、「曲がったことではない」と梅岩はいう。

例えば、問屋は「口銭」(手数料)を取るが、いくら取るかを明確にして、隠すことがない。

これが、商人が「直に利を取る」証拠だという。

商人は「直に利を取る」ことで身が立つ。これは「商人の正直」に他ならない。もしも、利を取らないならば、それは「商人の道」とはいえない。

「直に利を取る」ためには、代金を明確にするだけでなく、その商品・サービスに関して、顧客にすべて隠すことなく、明確に情報として提供し、顧客が十分に納得したうえで、商取引をすべきである。

③ 儉約を言うは他の儀にあらず、生まれながらの【正直】に還したき為なり。

儉約の目的の1つは、「生まれながらの正直」に還るためである。

④ この【正直】行わるれば、世間一同に和合し、四海の中皆兄弟の如し。

天より生民を降すなれば、万民はことごとく天の子なり。故に人は一個の小天地なり。小天地ゆえ、本私欲なきものなり。この故に 我が物は我が物、人の物は人の物、貸したる物は受け取り、借りたる物は返し、毛筋ほども私なく、ありべかりにするは【正直】なる所なり。この【正直】行わるれば、世間一同に和合し、四海の中 皆 兄弟の如し。我願う所は、人々ここに至らしめん為なり。

齊家論における中核の1つと言える部分である。

人は全て天から降ろされた「天の子」である。ゆえに「小天地」とも言える。小天地なのだから、本来「私欲」はない。自分と他人の物をはっきりと分けて、貸したものは返してもらい、借りたものを返す。少しの私欲もなく、「ありのまま」にするのが、「正直」なのだ。この正直が行われるなら、「世間が和合し、世界が兄弟のごとく1つになる」。

これが梅岩の願うところである。

- ⑤ 我言う所は【正直】より為す儉約なれば、人を助くるに至る。

私欲をもってする儉約は、ケチにすぎない。

しかし、「正直」からなされる儉約は、人を助けることができるようになる。

- ⑥ 分けて士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして【正直】なるべし。

分けて士は政のたすけをなし、農工商の頭なれば、清潔にして【正直】なるべし。もし私欲あらば、其の所は常闇なり。又農工商も家の主は家内の頭なり。もし私欲あらば 家内が常闇となる。すべて物の頭となる者は可慎事なり。然るに欲心に覆われ、此の【正直】を行わずして、浅ましき交わりになり行くは悲しきことなり。

武士は治世を行う「農工商の頭」なのだから、清潔で「正直」であるべきだ。もし、私欲があるならば、治世は暗闇に陥る。農工商であっても、家の主は「家の頭」だ。もし、私欲があるならば、家内は暗闇に陥る。すべての「頭」は、慎むべきだ。それなのに「欲心」に覆われて、「正直」を行わずに、浅ましい交わりに行くのは、悲しいことだ。

「欲心という悪」は、「正直という善」の実践を邪魔する存在なのである。

- ⑦ 【正直】を守らんとせば、先ず名聞利欲を離るべし。

【正直】を守らんとせば、先ず名聞利欲を離るべし。然れども柔弱にては離れ難く、名利の心は発るべし。発るとも一生行なわざれば、さても【正直者】なりと、天下の人悦ぶべし。

「正直」を守ろうと思えば、名誉欲・金銭欲から離れるべきである。しかし、気力に欠け、弱々しければ、名誉欲・金銭欲が起こってしまうことはあるだろう。だが、名誉欲・金銭欲が起こっても、その思いのままに行動しなければ、「正直者だ」と天下の人が喜ぶだろう。

名誉欲・金銭欲に囚われるなら、「正直」を実践することができないのである。

⑧ 人の心は自然に慈悲・【正直】なる所あれば

人の心は自然に慈悲・正直なる所あれば 汝の裸になられし其の日より、感心せし負せ方が寄り集まりて着すべし。

借金で丸裸になったときでも、人に慈悲と正直があるのだから、心ある人が必ず支援してくれるものである。

⑨ 予はこの惻隱の心の発る所を 直に行うを【正直】という。

是即ち【惻隱の心】なり。予はこの【惻隱の心】の発る所を 直に行うを【正直】という。舜の大聖人と言えども、瞽瞍人を殺さば 善悪を選ばず 負うて遁れて隠れ給うべしと、孟子ものたまう所なり。

聖賢の説き給う【惻隱の情】は、直に真心なり。思うて得るにあらず、勉めて中にあらず、天理の自然なり。程子の所謂 聖人の心は明鏡止水のごとく四方八方を照らし給う。また神道にて 八咫鏡と申し奉るは、直に天照大神宮の御心にて 天が下あらんかぎりを照らさせ給う。神聖の御心如斯。一塵もとどめぬ御心にて乾坤を貫き給う。これ明らかなりといわんや、直なりといわんや、また正しきといわんや。

「正直」とともに、「惻隱」が掲げられた、齐家論の最後に掲げられた文章である。

「惻隱の心の発る所を、直に行うを正直」であると、梅岩は言う。惻隱の心は「良心」に他ならない。ゆえに「良心のままに、直に行うことを正直」と言い換えてもよいだろう。

大聖人・舜でさえ、父親が人を殺したときに、逃がそうとした。このような行為を梅岩は、「惻隱の情」であるといい、これが「真心」であり、「天理の自然」であるという。

朱子学における聖人の心は、「明鏡止水」のごとく四方八方を照らし、神道の八咫鏡は「天照大神宮の御心」であり、天下を照らしている。これは、「明らか、直なり、正しい」というだろう。

最後の「明らかなりといわんや、直なりといわんや、また正しきといわんや」は、神道における「浄明正直（じょうめいしょうちよく）」を顕しているものと考えられる。

以下、東京都神社庁の HP より。

「浄明正直」とは清（きよ）き（浄き）、明（あか）き（明るい）、正しき、直（なお）き（素直な）

心のことで神道の根本を表わす言葉の一つです。

古事記や日本書紀にも現在の「善」を表わす言葉として「きよき」「あかき」などの言葉が多く登場することから、古来より私心の無い清らかで澄んだ心が個人や社会にとって重要とされていた事がわかります。

神道において人は本来、浄明正直な神様の御心のまま清らかな心を持つと考えます。

梅岩は、若き頃に神道に傾倒していた。

また、「古より神国の相(たすけ)に、儒道を用い玉うことを知るべし」とも言っている。

ゆえに「梅岩の正直」は、思想的背景に「神道」が存在しており、「浄明正直」の短縮形なのだろう。

「浄明正直な神様の御心」は、惻隱の心の発る所を直に行く「梅岩の正直」に通じている。

正直と儉約と齐家論

ここで改めて、正直と儉約の関係性を列挙しておく

- ① 【儉約】を言うは他の儀にあらず、生まれながらの【正直】に還したき為なり
- ② 我言う所は【正直】より為す【儉約】なれば、人を助くるに至る。

「生まれながらの正直に還る」ことを目的とした、儉約だからこそ「人を助けるに至る」のである。

儉約の目的を以下のとおりとしたが、いずれも「正直」なしに成し遂げることはできない。

- ① 生まれながらの正直に還る。
- ② 他者を愛し助ける、仁の実践。
- ③ 修身・齐家・治国・平天下の実現。

これらが明らかになったのは、すべて「齐家論」の功績である。

「正直」は、都鄙問答に 12 回、齐家論に 29 回書かれている。

「儉約」は、都鄙問答に 8 回、齐家論に 37 回書かれている。

この数値からもわかるように、都鄙問答において「正直と儉約」は、さほど重要視されていない。都鄙問答は、性善や職分の道が重要視されており、「正直と儉約」はその中に埋もれてしまっている。

職分の道

梅岩は「商人道の開祖」とも言われる。だが、その対象とするところは、商人に留まらず、農民、武士から、医者まで幅広く、「それぞれにおける職分の道」を説いている。

「正直と儉約」など、どの職分でも「同一の善」もあるが、「異なる善」もある。ゆえに、「職分ごとの道」の概要を以降に示したい。「道」とは、正しい生き方であり、「善の実践」ともいえる。

① 農民の道

「都鄙問答の段」にて、ある人は「自分たちのような農民は、礼儀や意義を学ぶ学問など、到底できるものではない。」と嘆く。それに対して、梅岩は「農民の道」を説いて行く。

農人ならば、朝は未明より農に出て、夕には星を見て家に入る。我身を勞して人を使ひ、春は耕し、夏は芸、秋の蔵るに至るまで、田畠より五穀一粒なりとも、多く作り出ことを忘れず、御年貢に不足なきやうにと思ひ、其余にて父母の衣食を足し、安樂に養い、諸事油断なく勉むる時は 身は苦勞すといへども、邪なき故に心は安樂なり。身を肆にし、年貢不足する時は、心の苦しみと成る。我教所は心を知りて、身を苦勞し勉むれば、日々に安樂に至ることを知らしむ。心を知りて行うときは、自ら威儀正しくなり、安きを知ることなれば何をか疑わんや。

農民の学問とは、農民として勤勉に働く「実践の学問」であって、文字で学ぶ以上に重要なものだ。文中の「我教所は心を知りて」「心を知りて行う」とあるが、この心こそ「良心」であろう。良心を知ったうえで、身も苦勞し勤めるなら、日々に安樂に至る。

② 武士の道

「武士の道を問の段」にて、梅岩は孟子の言葉を使い、次のように説明している。

武士の道は「仁義のみ」だ。罪無き者を一人でも殺すならば、「仁」ではない。自分のものでないものを奪うならば、「義」ではない。居るべきところは「仁」にあり、道は「義」にある。また、状況によっては、「義」のために命を捨てるのが武士である。

③ 医者の道

「医の志を問うの段」にて、梅岩は次のように説明している。

第一に医学を学ぶことに心を尽くすべきだ。医学の書物の意味を十分に理解することなく、人の命を

預かることは恐ろしいことだ。

自分の命を大切にすることを思って、他人の命の大切さを推し量るべきだ。そのように考えれば、病人を預かったときは、一瞬たりとも心が緩んだりしないものだ。

人の命を大切に思い、薬を施す。(恵み与える) 施しの心を持ち、病気が快然することを楽しみとし、礼金の事を思わず、治療すべきだ。こちらが礼金を思わずにいても、病人の命を心配する家族から、身分相応の謝礼があることだろう。

④ 商人の道

梅岩は「商人の道を問うの段」「或る学者 商人の学問を譏るの段」に渡り、商人道を説いているが、ここでは、代表的な言葉に限定し、以下に列挙する。

- 商人で道知らない者は、貪ることだけを勉めて家を滅ぼす。
- 商人は勘定くわしくして、一銭軽しと云うべきに非ず。
- 物を売ることによって利を得るのは、商人の道である。
- これ(利)をかさねて富をなすは商人の道なり。
- 富の主(あるじ)は天下の人々なり。
- 二重の利を取り、甘き毒を喰ひ、自死するやうなこと多かるべし。
- まことの商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり。

梅岩学における孟子の性善

梅岩は都鄙問答において、「孟子の性善」に関して、どのように述べているのか。

この言葉は「性理問答の段」のみで11回使用されているのだが、この中で重要なもののみ、以下に示す。

- ① 【孟子の性善】を貴び、糟を食いとすするには非ず、我心に合うゆへなり。
- ② 【孟子の性善】は前にいう如く、悪に對する善に非ず。誤るべからず。
- ③ 【孟子の性善】は直に天地なり。
- ④ 【孟子の性善】は生死を離れて天道なり
- ⑤ 書は読めども、書の意味を知らず。却て【孟子の性善】を非と見るなり。
- ⑥ 【孟子の性善】を得れば、白昼に黑白を分くる如し。
- ⑦ 【孟子の性善】との玉うは、心を尽して性を知り、性を知る時は天を知る

以降、これら1つ1つに対して、以降、詳細な説明を加えてゆく。

- ① 【孟子の性善】を貴び、糟を食いとすするには非ず、我心に合うゆへなり。

孔子を是とせば孟子も是なり。【孟子の性善】を貴び、糟を食い与するには非ず、我心に合うゆへなり。加様に説く時は、甚知り易きに似たれども、此上を味い得ることかたし。味い得ば、生死は一致なり。是故に、朝聞道夕死可矣と、孔子もの玉えり。

ある学者は、孔子を是とするが、孟子を受け入れない。

これに対して梅岩は「孔子を是とするなら、孟子も是であろう」と言い、さらに「孟子の性善を尊ぶのは、わが心に適うゆえ」であると述べてゆく。

梅岩の中で「知る」と「味わい得る」では、まったく意味が異なる。「知る」は頭で理解したレベルに過ぎないが、「味わい得る」とは「孟子の性善」に絶対的な確信を持つことである。

孔子の「朝に道を聞けば、夕べに死すとも可なり」をもってして、「朝に味わい得ることができれば、夕べに死すとも可なり」であり、ゆえに「生死が一致するほどである」と解説する。

② 【孟子の性善】は前にいう如く、悪に對する善に非ず。誤るべからず。

「前にいう如く」とは、以下の文章を示している。

扱、孔孟の曰所の善を世に見誤ること多し。性が善ならば世の中は皆善人にて、悪人はなき筈なり。然るに悪人も多ければ、定めて虚名ならんと疑う者多し。是以て味い得る者少なり。如何となれば今日の上、此は善、彼は悪と善惡對々の善と見るゆへに、聖人の宗を失して、大なる謬出る所なり。

梅岩は、「世間の人々の多くが『性が善ならば、世の中の人は皆善人であって、悪人はいないはずだ』と間違った理解をしている」と述べる。

「性善」は現代でも、「人の【生まれつきの性質】は善である」と誤解されている。このような誤解があれば、「世の中の人は皆善人」という誤解が生じるのは当然である。

人の【生まれつきの性質】は、全てが善ではない。「本能」は生まれつきの性質だが、この本能から生じる「欲望」は、人を悪に導きやすい。同じく「感情」も生まれつきの性質であるが、「怒る・憎む・恨む」などの感情は、人を悪に導きやすいものである。これらは既に「悪とは何か」の章で説明している。

梅岩は、「善惡對々の善」と見ることを、「聖人の大本の教えを失った、多いなる誤謬」であると指摘している。世の中に「善人と悪人」が存在するというのは、「事実」である。しかし、それは「善惡對々の善」であり、言い替えれば「相対的な善」に過ぎない。

相対的な善でないとするれば、それは「絶対的な善」でなければならない。この「絶対的な善」とは「良心が存在すること」である。その証拠に「善い良心」とか、「悪い良心」という言い方はされない。時に極悪人が「良心がない」と言われるだけである。

悪人の存在が「良心の存在」の否定にはならない。なぜなら、悪人にさえ「良心は存在する」からである。悪人でさえ、幼子が井戸に落ちようとしているのを見れば、これを助ける。もしも、このような「良心がない」のだとするれば、それは「人に非ず」と孟子も述べているのである。

ゆえに梅岩は、「悪に對する善に非ず」と言い、「善惡對々の善は誤謬」だと指摘したのである。

なお、「性善」は「人の【生まれつきの性質】は善である」ではなく、「人の【生まれつきの本性】は善である」であり、この本性こそが「良心」なのである。

- ③ 【孟子の性善】は直に天地なり。
- ④ 【孟子の性善】は生死を離れて天道なり

【孟子の性善】は直に天地なり。如何となれば人の寢入りたる時にても、無心にして動くは呼吸の息なり。其の呼吸は我息には非ず。天地の陰陽が我体に入出入りし、形の動くは天地浩然の気なり。我と天地と渾然たる一物なりと貫通する所より、人の性は善なりと説き玉う。【自然にして易に合えり】。扱此所は前後ともに聞き分けがたき所なり。黙して工夫せらるべし。【易は天地の上にて説き玉えば】、凡て無心の所なり。其の無心の陰陽が一たび動き、一たび静なり、是を継ぐ者が善なりとの玉うことなり。此微妙の所と、告子が云う思慮と、一列にいわるべきや、大に異なる所なり。【孟子の性善】は生死を離れて天道なり、いかんぞ告子が念々生滅する者と一列なるべきや。

孔子の言われる「易の性善」と「孟子の性善」が一致していることを梅岩は述べているのだが、その説明は、ほぼ「易の性善」に関するものであり、「孟子の性善」を説明したものではない。

この結果、様々な問題を孕んでゆくのだが、「性理問答の段」の問題点に関しては、別途後述する。

- ⑤ 書は読めども、書の意味を知らず。却て【孟子の性善】を非と見るなり。

世の人書物を読みながら、此の性善を知らず。不知して書を読む者を喩えていわば、病人の如し。無事の人食の美き味わいを知りこゝを以って喜ぶ。熱病人も食は喰えども、美き味わいを知らず。この故に不喜。性善を不知者も斯の如し。書は読めども、書の意味を知らず。却て【孟子の性善】を非と見るなり。【孟子の性善】も天なり。孔子の易の性善も天なり。

梅岩は「孟子の性善を知らぬままに書を読むのは、病人の如し」と言い、さらに「病人ならば、

書を読んでも、その意味を理解できず、孟子の性善を否定する」と指摘する。

この文にて「孟子の性善」を知ることが、如何に重要か理解できるはずだ。梅岩学を学んでも「孟子の性善」を知らないならば「病人」と同じであり、それは最早「梅岩学」とは言えない。

私が、本書をなぜ書いたのか。これで十分に理解していただけたらと思う。

⑥ 【孟子の性善】を得れば、白昼に黑白を分くる如し。

孟子の性善を得れば、白昼に黑白を分くる如し。他の非は聞かずして明らかに分かるゝなり。何ぞ非を知る事あらん。性善を知れば、定木を以て曲直を正すが如し。

「孟子の性善を知る（理解する）」は第一段階であり、「孟子の性善を得る」は第二段階である。「孟子の性善を得る」とは、「孟子の性善」に対して、絶対的な確信を持つことである。

「孟子の性善を得る」段階に至れば、何が正しいのか、「白昼に黑白を分くる」ほどに、明白に理解できるようになるのである。

⑦ 【孟子の性善】との玉うは、心を尽して性を知り、性を知る時は天を知る

孟子の性善との玉うは、心を尽して性を知り、性を知る時は天を知る、天を知るを学問の初じめとす。

この「性を知る」は、商人道や正直・儉約と共に、梅岩学の重要なキーワードである。その「性を知る」の性とは、「孟子の性善の性」であることは、この文により明白であろう。

そもそも、「心を尽し性を知る」の原文は、孟子の言葉（盡心章句上第1章）なのである。

孟子曰、盡其心者、知其性也、知其性、則知天也、存其心、養其性、所以事天也

現代語訳は、「心を尽して性を知る者は、その性を知る。その性を知れば、すなわち天を知る。その心を存して、その性を養うのは、天に仕えることである」。

「心を尽して性を知り、性を知る時は天を知る」とほぼ同じであることは、明白である。

さて、文末に「学問の初じめとす」と書かれているが、学問の初めとは「孟子の性善」を知ることでもある。

最後に、都鄙問答における「性を知る」を以下に列挙しておく。

- ① 我因所は孟子の、【尽心知性】 則知天と説き玉う
- ② 今云所は、【性を知る】を先とす。性を知れば行ひ至り易きの道なり。
- ③ 孟子も人を導き玉うは、【性を知る】を先として教え玉う。
- ④ 孟子は其の仁を知るところを教え玉う。依て心を尽し【性を知る】と説き玉えり。

梅岩学における四端

「四端」という単語自体は、梅岩二書でまったく使用されていない。
 そこで、「惻隠、羞惡、辞讓、是非」に分けて調査してみると、以下のようになる。

- 「惻隠」は、都鄙問答に1回、齊家論に4回、使用されている。
- 「羞惡」は、都鄙問答に4回、使用されている。
- 「辞讓」は、使用されていない。
- 「是非」は、都鄙問答、齊家論ともに多く使用されているが、「四端の是非」の意ではない。

さて、惻隠と羞惡は、「性理問答の段」にて、以下のように使用されている。

「子曰 無【惻隠】之心非人也 無【羞惡】之心非人也と。汝最前より心を不得を苦しんで赤面し、不善を恥るは即ち【羞惡】の心なり。其【羞惡】の心を推して知らば、【仁義の良心】に至るべし。」

また、「鬼神を遠ざくと云う事を問うの段」にて、1度だけ使用されている。

「汝も【羞惡】の心有りて身の辱めは受けざるなり。」

孟子が性善の説明において、何度も繰り返し、「惻隠、羞惡、辞讓、是非」を述べているのに比べると、あまりにその内容が薄く、また、回数もない。

「都鄙問答では、ほぼ四端を説明していない」と結論付けてよいだろう。

また、「齊家論」では、以下のように説明されている。

これ【惻隠の情】にて実情なり。・・・是即ち【惻隠の心】なり。予はこの【惻隠の心】の発る所を 直に行うを 正直という。舜の大聖人と言えども、瞽瞍人を殺さば 善悪を選ばず 負うて遁れて隠れ給うべしと、孟子ものたまう所なり。聖賢の説き給う【惻隠の情】は 直に真心なり。思うて得るにあらず、勉めて中にあらず、天理の自然なり。・・・予言う儉約は ただ衣服・財器のことにあらず。全て私曲なく、心を正しうする様に教えたまひ志なり。

これは、「齊家論」の一番最後の部分である。最後の最後で徹底して「惻隱」を語っている。

「齊家論」は「都鄙問答」よりも後に書かれており、「都鄙問答」で説明し足りなかった部分を書こうという思いが、梅岩にはあったのではないか。（「齊家論」自体に、「都鄙問答」で説明し足りなかった「儉約」を補足するために書かれたことは、明記されている）

「惻隱の心の発る所を 直に行うを 正直という」を、さらに解説する。

四端の中心である「惻隱の心」の「発る所」とは、「性」であり、「良心」に他ならない。この良心をそのままに「直に行う」ことが、「正直」なのである。

「天の命これを【性】と云う、【性に率（したが）う】は人の道なりと説き玉う」と梅岩は述べている。この「性」を「良心」に置き換えれば、次のようになる。

「天の命これを【良心】と云う、【良心に率う】は人の道なりと説き玉う」

「良心に従う」という言い方は、現在でも多くなされるが、「良心に従う」（良心に率う）ことこそ、人の道であり、「正直」な生き方なのである。

梅岩は、「古より神国の相に儒道を用い玉う」とも述べており、その姿勢は、梅岩自身の理論においても、同様であろうと思われる。

「惻隱の心の発る所を 直に行うを 正直という」は、儒道の「惻隱の心」をもって、神道の「正直」を明かした言葉でもある。

東京都神社庁のHPには『「浄明正直」（じょうめいしょうちよく）とは清（きよ）き（浄き）、明（あか）き（明るい）、正しき、直（なお）き（素直な）心のことで神道の根本を表わす言葉の一つ』と書かれている。

梅岩学の問題点

本書の初頭において、以下のように問題を提起した。

このように都鄙問答では、徹底して「孟子の性善」の重要性を強調している。それにも関わらず、実のところ「孟子の性善とは何か」に関して、明確な説明がなされていない。これは「孟子の性善」を誤解されかねない大きな問題である。

「孟子の性善」のキーワードは、「四端と仁義礼智」であるのだが、梅岩二書において「仁義礼智」は随所にありながらも、「四端」のキーワードは一切ないことを先に示した。

さらに、四端の「惻隠」「羞惡」は、存在するものの少数であり、これらが「どのようなものか」詳細な説明がないことも明らかにした。

本書の目的の1つは、梅岩二書において明確にされていない「孟子の性善」を、梅岩二書と孟子をベースに解き明かしてゆくことにあった。

すでに、この目的は十分に果たされていると確信するが、本章ではさらに「梅岩二書において、誤解・混乱を生む内容」を明確にしてゆく。

孟子の性善と易の性善

本書の初頭にて、『源了圓の「孟子の性善」の説明は間違っている』と指摘した。その文面は以下のとおりである。

孟子のいう「性善」は、「天地とわれわれが完全に一体になりきった状態である。この状態はわれわれが無心になりきったときに現出する。ところでこの無心なるものは宇宙の生命そのものであって、それは静・動の運動を繰り返す。その運動を自己の生命活動において継ぐもの、これは善としかいいようがない。この善悪を超えた善は各自が対象論理の立場を離れて感得するほかはない。」

この文には、「四端と仁義礼智」が一切説明されていない。ゆえに、「孟子の性善」の説明にはなりえない。

では、源了圓がここで何を説明しているのかと言えば、「易の性善」なのである。

「易の性善」を、梅岩は『孔子易に 一陰一陽之謂道 繼之者善也 成之者性也との玉う』と説明している。現代語訳は「一陰一陽これを道という。これを継ぐ者は善なり、これを成す者は性なり」である。

この孔子の言葉を、さらに梅岩が解説している。

【易】は天地の上にて説き玉えば、凡て無心の所なり。其の無心の陰陽が一たび動き、一たび静なり、是を継ぐ者が善なりとの玉うことなり。

源了圓の文は、「易の性善」を説明したこれらの文を元に書かれたものであることは明白である。

源了圓は「易の性善」と「孟子の性善」を取り違えて書いているのである。

梅岩は、この文の後も「孔子は天地を以て道の体を説明し玉う。孟子は人を以て道の体を説明し玉う。」
「孔子を是とせば孟子も是なり」「孔子孟子は割符の如し」「孟子の性善も天なり。孔子の易の性善も天なり」と繰り返し語る。

この結果、「(孔子の) 易の性善」 = 「孟子の性善」という図式が、読む者の頭に刷り込まれてしまう。
それが、源了圓のような間違った解釈につながってゆくのである。

「孟子の性善」が明確に解説されていたならば、読者は「易の性善」と「孟子の性善」の違いを理解しながらも、その本質部分における一致を理解することができたかもしれない。残念ながら、都鄙問答に「孟子の性善」の詳細な解説はないのである。